

博士論文（要約）

当事者研究の誕生

The Birth of Tojisha-Kenkyu

綾屋紗月

目次

はじめに

第一部 当事者活動における当事者研究の歴史的位置づけ

第1章 力を取り戻す：難病患者・障害者運動の系譜

第1節 障害者運動とエンパワメントの思想

1. アメリカにおける障害者自立生活運動
2. 障害の社会モデルおよびエンパワメント・アプローチの誕生
3. 日本の障害者人権運動：「青い芝の会」の活動
4. 日本における公的介護保障要求運動および障害者自立生活運動

第2節 向谷地生良を介した難病患者・障害者運動の影響

1. 管理教育への違和感
2. 生きづらさを抱えた青春時代
3. 難病患者・障害者運動との出会い
 - (1) 北海道難病団体連絡協議会
 - (2) 札幌いちご会
4. 「支援者としての疚しさ」から「当事者の責任」への気づき

第3節 浦河における当事者活動のはじまり

1. アイヌの人々およびアルコール依存症者との出会い
2. 回復者クラブ活動「どんぐりの会」の始動
3. 商売：昆布の袋詰め内職のはじまり
4. アルコール依存症支援における無力さ

第4節 まとめ

第2章 無力を認める：依存症自助グループの系譜

第1節 AAの日本到来とアディクション治療の展開

1. AAの誕生
2. AAのスタイルを統合したアメリカのアディクション治療
3. AAの日本到来：禁酒から断酒へ
4. 日本そして札幌におけるアディクション治療

第2節 川村敏明を介した依存症自助グループの影響

1. 水産学部から医学部精神科へ
2. アルコール・薬物依存症者との出会い
3. 浦河における向谷地との出会い
4. 向谷地のプロの技から学ぶ
5. 向谷地による応援的支援の実践

第3節 浦河における当事者活動の醸成

1. 断酒会に対する違和感
2. 浦河 AA のはじまり
3. アディクション治療の研鑽を積む：アディクション・アプローチ
4. 川村の診療スタイルの確立
5. 向谷地の「精神科立入禁止」

第4節 まとめ

第3章 当事者研究の誕生：2つの当事者活動の系譜の合流

第1節 「社会進出」のツールとしての SST

1. 本格的な商売の開始
2. SST の日本上陸と向谷地の抵抗
3. エンパワメント・アプローチとしての SST の導入

第2節 浦河 AA とアディクション治療

1. 活発に活動する浦河 AA と川村の再赴任
2. アディクション治療の統合失調症への応用
 - (1) 人とつなげる支援
 - (2) 失敗の尊重
 - (3) 自ら考え語るための支援
 - (4) 語りを広め、知恵を貯えるための支援
 - (5) 支援者の無力を認める
3. 合流のはじまり：弱さの情報公開

第3節 当事者研究のはじまり

1. SST の行きづまり：「希望志向」から「前向きな問題志向」へ
2. 浦河における SA の誕生
3. 「研究」のはじまり
4. 浦河べてるの家における当事者研究の実践
5. 当事者視点による比較：SST・SA・当事者研究

第4節：依存症自助グループへの当事者研究の還流

1. NA およびダルク (DARC) の誕生
2. ダルク女性ハウスにおける当事者研究のはじまり
3. ダルク女性ハウスにおける当事者研究の実践

第5節 まとめ

第二部 周縁者としての自閉スペクトラム症者の当事者研究

第4章 障害者運動から見た自閉スペクトラム症概念批判

第1節 混沌：言語化できない「わからなさ」

1. 混乱の日々
2. 当事者の語りと診断名
3. 自閉スペクトラム症概念の弊害と障害者運動との出会い
4. 当事者研究との出会い

第2節 障害の社会モデルに基づく従来の自閉スペクトラム症概念批判

1. 自閉スペクトラム症の急増とその原因
2. 自閉スペクトラム症概念の障害学的問題

第3節 さらなる周縁化のツールとして用いられる自閉スペクトラム症概念

1. 薬物依存症者の自助的な回復施設における周縁化
2. 聴覚障害者コミュニティにおける周縁化
3. 視覚障害者コミュニティにおける周縁化

第4節 まとめ

第5章 身体的自己感の当事者研究

第1節 意味のまとめあげ困難

1. 身体の意味のまとめあげ困難
 - (1) 「空腹感」がわからない
 - (2) 「冷え」がわからない
2. モノの意味のまとめあげ困難
 - (1) 大量の<刺激>を感受する
 - (2) 意味づけ前の刺激レベルの情報の飽和
 - (3) 意味づけされたレベルの情報の飽和

第2節 行為のまとめあげ困難

1. 身体やモノのアフォーダンス
2. アフォーダンスの中にある「相同」と「相補」

第3節 他者との階層の差異から来る困難

1. 意味の階層構造のズレ
2. 行為の階層構造のズレ
3. 三項関係におけるアフォーダンス共有の失敗
4. 文脈共有の困難

第4節 まとめあげ困難をもたらす「夢侵入」

1. 夢のはじまり
2. 夢の世界
 - (1) フラッシュバック

(2) ヒトリ反省会

(3) ヒトリタイワ

(4) オハナシ

3. 夢のあと

第5節 不安定な身体的自己感

1. 曖昧な動きで「私」が壊れる
2. 詳細な行為パターンによって侵入から解放される
3. 予測誤差への気づきやすさとあやふやな自己感

第6節 周囲の配置転換と自己感の安定化

1. 社会と自己感
2. 「普通」の世界への幽閉
3. 言葉による2つの自己感の安定化
4. 動きによる身体的自己感のさらなる安定化
5. 自分が生まれ、ヒトやモノとの距離が生まれる

第7節 まとめ

第6章 自己身体を基点とした社会変革としての情報保障

第1節 記号のまとめあげにおけるすれ違い

1. 記号表現「音声」のまとめあげにおけるすれ違い
2. 記号表現「文字」のまとめあげにおけるすれ違い
3. 記号内容のまとめあげにおけるすれ違い

第2節 身体的特徴に対応した情報提示のデザインの提案

1. 記号表現「音声」のまとめあげに関する情報提示のデザイン
2. 記号表現「文字」のまとめあげに関する情報提示のデザイン
3. 記号内容のまとめあげに関する情報提示のデザイン
4. 社会の変容性への挑戦

第3節 意味づけ介助の発展：ソーシャル・マジョリティ研究

1. 「ソーシャル・マジョリティ研究」の誕生
2. ソーシャル・マジョリティ研究会セミナーの進め方
3. ソーシャル・マジョリティ研究の活用方法
4. 複数の学術研究をつなぐ学際的な役割

第4節 まとめ

第7章 置き去りにされた過去と歴史的自己感の当事者研究

第1節 身体的自己感の安定が生み出した「時間」

1. 疎外感から生じる現在の私の否定
2. 物語の破綻：時間の停止
3. 再び動き出した時間：「時間軸」の誕生
4. 現在感と過去感の入替現象

第2節 「現在の私」と「過去の私」の分離

1. 「症状」の切り分け：他者性と怒りの到来
2. 強度のある現在の記憶の蓄積
3. 分離の完成：「高校生の私」の誕生
4. 現在の変革：親との関係性

第3節 「現在の私」と「過去の私」の共存

1. 時制の往復：過去と現在の併走とかすかな接触
2. 同時的語り掛け：3者構造
3. 同時出現と対話：「現在の私」の先導
4. 「15の人のお出まし現象」の当事者研究

第4節 過去の変容

1. 過去からの委託
2. 「過去の私」に生じたわからあい
3. 過去の再解釈1：憎んでいた「あいつ」らへの共感
4. 過去の再解釈2：支配する「あいつら」への忌避感
5. 現在の私の変容：静かな悲しみの到来

第5節 まとめ

第三部 当事者研究の方法論的検討

第8章 未来に向けて：当事者研究を仲間に伝える実践

第1節 「浦河べてるの家」と「ダルク女性ハウス」の共通点

- (1) 自分を開いて仲間と共有する—自分自身で、共に
- (2) 自分の問題を自分の外に出す—外在化
- (3) 興味・関心によるワクワク感
- (4) 仲間の知恵の伝承
- (5) 自分助けとして症状を扱う
- (6) 発見を祝う
- (7) 目的意識をゆるめる
- (8) 先行して警戒を解く

第2節 社会モデルと2つの自己感に注目した当事者研究の方法論

1. 2つの「自分」を探究するデザイン
2. ワークシートの変遷
3. ワークシートとワークの説明
 - (1) イントロダクション（導入）
 - (2) ワーク1：研究テーマ
 - (3) ワーク2：苦勞のエピソード
 - (4) ワーク3：苦勞のパターン
 - (5) ワーク4：苦勞の年表
 - (6) ワーク5：個人的要因／社会的要因
 - (7) ワーク6：仲間のコメント
 - (8) ワーク7：実験計画
 - (9) ワーク8：実験報告
 - (10) クロージング（結び）

第3節 ダルクにおける当事者研究ワークシートを用いた実践

1. テーマ1：ワークの位置づけ
2. テーマ2：ワーク運用上の留意点
3. テーマ3：関係性
4. テーマ4：解放性
5. ワークシートを用いた実践のダルクにおける効果と運用上の配慮

第4節 まとめ

おわりに

付録 当事者研究ミーティングの基本情報

注・文献表

はじめに

当事者研究とは 2001 年、精神障害をかかえた当事者の地域活動拠点である北海道浦河町の「浦河べてるの家（以下、べてる）」で生まれたものである。当時の浦河町は、「沿岸漁業の衰退」による「過疎化」や地域経済の悪化を抱えた周縁化された地域だった。その中でもさらに、そこに住む精神障害者たちは周縁化されていた。浦河の精神病院に入院した統合失調症患者の多くは、一度、「就職や進学のために都会に」出たが具合を悪くして戻ってきた人々であり、「年老いた両親と一緒に暮らしながら入退院を繰り返し、働く場もなく人目を避けて」生活していた（浦河べてるの家、2002、p.36）。ときおり彼らは「暴力問題」や「無銭飲食」を起こし、地域から差別・偏見のまなざしを向けられていた。当時、統合失調症者は対話および症状について理解・表現が不可能であると考えられ、長期に渡り精神病院に入院している人々がいた（浦河べてるの家、2002、p.25）。複雑で重複した逆境に直面している浦河の精神障害者たちに対して、彼らを精神病院に隔離し、困難を医学的診断名によって分類し、それに基づいて薬物を中心とした治療を行う旧来の精神医療ができることはわずかだった。

当事者研究は、このような周縁中の周縁に置かれた人々の中から生まれた、自分助けの実践であった。専門知が必ずしも自分の苦勞のメカニズムを説明することも、その解決を与えることもない状況の中で生まれた当事者研究は、苦勞のメカニズムの解明や対処法を専門家に「丸投げ」することなく、「仲間と共に、自分の苦勞の特徴を語り合うなかで」、自らの症状における苦勞の規則性や「自己対処の方法」などを研究する実践だった（浦河べてるの家、2005、pp.4-5）。当事者研究には、いわゆる決まった手順はなく、テーマ設定も、研究方法も「基本的に自由」であり（べてる しあわせ研究所、2009、p.45）、その堅苦しくない気軽な雰囲気も魅力となって、日本全国だけでなく海外にも広まっている。この急激な広まりは、多くの当事者の潜在的なニーズに当事者研究が応えるものであったことを示唆する現象だと言えるだろう。

本論文では、先行する当事者による活動の歴史の中に、この当事者研究という実践を位置づけることによって、先行するそれらの実践のどのような理念や方法を、当事者研究が受け継いできたのかを明らかにする。また、先行する実践と当事者研究との差異に注目することで、どのような当事者の、どのような潜在的ニーズが、先行する実践によって満たされず、当事者研究によってはじめて満たされたのかを考察する。さらに、2006 年以降継続してきた、筆者自身の当事者研究を分析することを通じて、当事者活動の潮流からはぐれ、当事者コミュニティの中でも周縁化されがちな自閉スペクトラム症における当事者研究の意義を検討する。

第一部では、当事者活動の歴史の中に当事者研究を位置づける。具体的には、当事者研究が誕生した北海道浦河町にあるべてる、そして、2006 年頃から当事者研究を導入した女性薬物依存症者の自助的な回復施設である「ダルク女性ハウス（以下、ハウス）」という 2 つのグループに着目する。第一部は第 1 章から第 3 章で構成される。

第 1 章では、べてるの中心的な支援者の一人であるソーシャルワーカーの向谷地生良（以下、向谷地）を介して当事者研究に流れ込む当事者活動の歴史のうち、ソーシャルワークにおけるエンパワメント・アプローチの上流に位置づけられる障害者自立生活運動、そして北海道における難病患者・障害者運動の系譜を中心に辿る。向谷地は大学在学中にアメリカから到来した障害者自立生活運動そのも

の潮流にふれ、北海道における難病患者および身体障害者による社会運動を目の当たりにした。しかし、1978年にソーシャルワーカーとして就職した北海道浦河町の精神障害者たちが置かれている状況は、こうした社会運動の実践や成果とはほど遠いものだった。向谷地は精神保健領域でも当事者活動を実現しようと考え、精神障害者たちへの支援を展開した。その際に重視された「奪われてきた力を取り戻す」という意味でのエンパワメントの思想について概観する。

続く第2章では第1章同様、当事者研究に影響を与えた当事者活動の歴史のうち、アルコール依存症者の自助グループである「アルコホーリクス・アノニマス (Alcoholics Anonymous : 以下、AA)」の系譜と、向谷地と並ぶ、もう一人のべてるの中心的な支援者である精神科医の川村敏明 (以下、川村) が取り組んだ、AAとの連携体制を持つアディクション治療が浦河に到来するまでを辿る。まず、AAおよびAAとの連携体制を持つアディクション治療がアメリカで誕生し、日本、そして北海道の札幌に到来するまでの経緯をみていく。次に「無力を認める」ことを回復の第一歩とするAAが浦河の地に運ばれ、その後、札幌で川村がAAとの連携体制を持つアディクション治療を習得する経緯を概観する。

そして第3章では、第1章で見た難病患者・障害者運動の系譜と、第2章で見たアルコール依存症者の自助グループであるAAの系譜が、どのようにべてるで出会い、当事者研究の誕生に至ったのかを概観し、その実践の枠組みについても述べる。難病患者・障害者運動とAAは、どちらも当事者が中心となって当事者を支援する活動である。しかし、障害者運動が奪われた力を取り戻し、社会変革を目指すのに対して、AAでは自分の無力を認め、社会に意見をしないことを旨とするなど、互いに相容れない要素もある。当事者の「力」という観点では一見、正反対のように見える両実践であるが、それぞれの系譜に背中を押されつつもそこから周縁化された当事者にとっては、これら双方の態度が不可欠であったことを述べる。その具体例として第3章の最後となる第4節では、薬物依存症者回復施設の1つであるハウスにおける当事者研究のはじまりを概観し、その実践の枠組みについても述べる。依存症自助グループの影響を受けて誕生した当事者研究が、再び、依存症自助グループに取り入れられた経緯をみることで、AAなどの既存の自助グループが周縁化してきた女性薬物依存症者や、重複的な社会的排除を受けるマイノリティ性を持った依存症者にとって、無力を認めることだけでなく、力を取り戻すことや社会変革への潜在的ニーズに応えることが不可欠であること、そして当事者研究がそのようなニーズに応えるものであることを確認する。

以上、第一部全体を通じて、当事者研究とは「難病患者・障害者運動」と「依存症自助グループ」という2つの対照的な当事者活動に影響を受けながらも、両者から周縁化されたがゆえに両者の実践を同時に必要とした当事者の潜在的ニーズに応えるかたちで、2つの活動が合流し、誕生した実践であることを示す。

当事者研究が当事者活動に影響を受けつつも、当事者活動によって周縁化された当事者の潜在的ニーズに応える可能性を秘めたものであるとするならば、現代社会において、当事者活動から周縁化されがちな人々の困難に対して、当事者研究を応用していこうと考えるのは自然な展開と言える。自閉スペクトラム症を含む発達障害者とは、まさに、そのような人々の一例であろう。事実、さまざまな当事者コミュニティにおいて、コミュニティが共有する価値観やルールから逸脱しがちなメンバーに対して、自閉スペクトラム症などのラベルが、コミュニティの中心に位置する当事者たちや専門家から

貼られるという事例は決して珍しいことではない。そのような経緯を踏まえ、第二部では、筆者がおこなってきた自閉スペクトラム症の当事者研究を分析し、それが当事者活動や当事者研究にもたらしたものを考察する。第二部は第4章から第7章で構成される。

第4章では、まず、当事者研究に出会う以前の筆者の個人史として、幼少期以来、理由のわからない周囲とのズレを突きつけられ続け、混乱の中を生きてきた筆者が、周囲との差異や抱えている困難を可視化してくれる「自閉スペクトラム症」という診断名によって、生きやすさがもたらされた経緯を述べる。

しかし同時に、筆者は自閉スペクトラム症概念が持つ問題に気づくことになる。自閉スペクトラム症は、国際的な診断基準である DSM-5 によって、1) 様々な文脈を超えて、全般的な発達の遅れでは説明のつかない、社会的コミュニケーションと社会的相互作用における持続的な欠損 (“persistent deficits in social communication and social interaction across multiple contexts”) があり、2) 行動、興味、活動の限局的かつ反復的なパターン (“restricted, repetitive patterns of behavior, interests, or activities”) が認められる、という 2 つの特徴で定義されている (APA, 2013)。つまり、個人の特徴を記述するはずの医学的診断において、他者とのコミュニケーション上の障害を中核的な特徴として定義しており、その結果、他者との「間」に起きる一過性の現象としてのコミュニケーション障害が、あたかも、個人の「中」にある永続的な特徴であるかのような誤解を与えかねないものとなっているのである。このことは「障害は社会環境側にある」と主張する障害者運動全体を貫く「障害の社会モデル (以下、社会モデル)」の視点が、未だ十分に自閉スペクトラム症においては取り入れられていなかったことを意味している。

筆者は診断を得て既存の医学的なカテゴリーに救われつつ、それとほぼ同時期に障害者運動や社会モデルの考え方に会ったことにより、このような自閉スペクトラム症概念の論理的な問題に直面した。そのため、障害者運動の視点からの批判を加えるかたちで筆者の当事者研究は始まることになる。

自閉スペクトラム症概念を社会モデルの視点から再構築し、障害者運動の系譜の中に再配置するためには、コミュニケーション障害という人と人との「間」の現象を、個人帰属する特徴として記述するというこれまでのやり方を否定し、対人関係以前に筆者が永続的に状況を超えて持ち続けている経験の構造を詳細に記述しなおす必要があった。こうした経験構造に、筆者の身体の特徴が露わになっていると考えれば、それは筆者の「身体的自己感」を特定しようとする研究とも言える。そこで第5章では、筆者のこれまでの当事者研究のうち、身体的な特徴について言語化した仮説を分析する。それは、「身体内外から来る情報を意味のあるカテゴリーにまとめあげ、行動につなぐことの困難」が筆者の永続的な身体的特徴であるとする仮説である。筆者にとって身体的自己感を明らかにする当事者研究の持つ意味は大きかった。身体的自己感を把握できるようになることは、筆者に自己身体を基点とする生きやすさをもたらし、筆者と他者との関係形成にも著しい変化をもたらしたのである。

しかし残念ながら、これで筆者の抱えてきたすべての生きづらさが解決するというわけではない。たとえ正確な自己感を獲得したとしても、その自己感をどういう文脈におくのかという重要な視点が残るからである。せっかく得た等身大の身体的自己感を、多数派の社会に適応的に変化させようとする「障害の個人モデル (以下、個人モデル)」の文脈に、再び乗せてしまうのでは意味がない。身体的自己感の実現もまた、社会モデルのなかで行われる必要があると言えるだろう。

第一部で見た当事者研究に注ぐ当事者活動の2つの系譜の合流について振り返るならば、努力では変えられない自分の身体的特徴の限界である「無力さ」を自覚したあとに待ち受けているのは、「誰にも頼らず一人で全てをやりとげられる」という思い込みを捨て、「弱さを絆に」というべてるの理念のとおり、他者とつながり、他者からの支援を得ながら生きていくために、社会環境側を具体的に变えるよう要求していくことだと考えられる。そこで、続く第6章では、第5章で見出した身体的特徴を踏まえ、社会にどのような変化をもたらすことが筆者の生きやすさにつながるかについて、「情報保障」という観点から述べていく。対人関係上の困難をこれまでのように個人の側に帰属されるコミュニケーション障害という概念で説明するのではなく、多数派の身体的特徴に合わせてデザインされた情報提示の仕方やコミュニケーションルールを問い直し、少数派の身体的特徴をもつ者が参入しやすい情報デザインやコミュニケーションルールを考案する、と捉えるこの情報保障という考え方も、これまで視覚障害や聴覚障害の領域で広まってきた、社会モデルに基づく支援法である。これを、自閉スペクトラム症にも応用することで、社会モデルに基づく自閉スペクトラム症支援を提案しようとするのが本章の目的である。ただし視覚障害や聴覚障害に比べ、自閉スペクトラム症の場合、多数派向けのコミュニケーションデザインのどの部分が障壁になっているのかについて、当事者自身がわからずにいることが多い。こうした問題に取り組むため、「多数派向けのコミュニケーションルール」がどのような仕組みになっているかを当事者の素朴な日常的疑問から出発して、さまざまな分野の研究者とともに考える、「ソーシャル・マジョリティ研究」という取り組みについても述べる。

第4章から第6章までの当事者研究は、主に現在および未来に志向し、社会変革をもたらそうとするものだった。その意味で、第一部で述べた当事者活動の二大潮流のうち、難病患者・障害者運動と親和性の高いものであったと言える。しかしこうした当事者研究を進め、現在の自分が安定していくほど、傷ついた過去の自分がまるで別の人物のように析出し、時折、現在の生活に侵入してくるといって、新しい苦勞が発生した。第7章では、第5章、第6章の取り組みでは解消されずに残った「想定していた人生の物語が断絶した」苦しみについての、筆者自身の当事者研究を分析する。第7章で扱う「過去の自分とどのように関係を取り持つか」という「歴史的自己感」の当事者研究がもつ過去志向的な側面は、依存症自助グループと親和性の高いものであり、筆者の個人史においてもまた、この段階においてハウスの当事者研究の実践が先行研究(=仲間の知恵)として欠かせないものであったこと、および現在の共同研究にもつながっていることを述べる。こうして筆者の当事者研究もまた、第一部で述べた二大当事者活動の影響を受けつつ進んでいったということが、第二部全体を通じて確認される。

第二部まで見てきた当事者研究を実践として受け継いでいくためには、理念や歴史を伝え、筆者の一事例を紹介するだけでは足りないだろう。これまで当事者研究を実践してきた仲間からも、新しく当事者研究に取り組もうとする仲間からも、べてるをはじめ、それぞれのグループで試行錯誤しながら進められてきた当事者研究の活動が長年大切に積み重ねてきた理念、実績、仲間の知恵、および、それらを土台として行われる具体的な形式や進行方法の事例を記録・分析し、多様な在り方や、共通する要素を後世に伝えていくことが少なからず望まれている。そこで第三部となる第8章では、べてるやハウスにおける当事者研究自体を具体的に進める実践方法の共通点を整理し、かつ、第二部で筆者が論じた2つの自己感に注目し、継承可能性を高めようとデザインした「当事者研究ワークシート」の取り組みを展望的に紹介する。

ここで、本論文と同様、ある特定の歴史的文脈の中に置くことで、当事者研究の意義を明らかにしようとする先行研究について述べる。石原（2013；2018）は、精神医学の歴史の中で、精神障害分類の行きつまりの先にある実践の1つとして当事者研究を位置づけている。そして認知行動療法、SST、フランクルの実践と比較することで、当事者研究の特異性を明らかにすると共に、それに先立つ当事者活動、障害者運動やAAについても述べている。しかし当事者研究誕生の直接の引き金となった北海道における難病患者や身体障害者による社会運動やアルコール依存症自助グループが、どのようにして当事者研究へとつながっていったのか、その詳細については触れられていない。また、向谷地（2016a）は、障害者自立生活運動に影響を受けた支援者のエンパワメント・アプローチと、北海道における難病患者・障害者運動、アルコール依存症自助グループという先行する当事者活動の系譜のそれぞれが当事者研究の誕生に影響していることを、べてるの活動の歴史的文脈に即して述べており、本論文に大枠を与える重要な先行研究となっている。しかし、石原論文に対する指摘と重なるが、浦河でAAがはじまるに至った歴史的経緯については、向谷地が直接関与していないためか触れておらず、AAから影響を受けた後に生じたべてるの展開にのみ、記述が限定されている。加えて当事者の具体的な声を通じて明らかになる、当事者の視点によって紡がれる歴史を十分に記述したとは言い難い。そこで本論文第一部では、AAが浦河ではじまった経緯を詳細に跡づけるとともに、当事者研究の誕生に直接的・間接的に関わった北海道の当事者の声を通じて、当事者の視点から紡がれる当事者活動の歴史の中に当事者研究を位置づけようとしている。

石原や向谷地とは異なり、上野（2013）は、女性という当事者の視点から女性学を切り拓いてきた立場を踏まえ、多数派の視点に偏らざるを得ない「客観性」「中立性」といった概念を前提とする既存の学問研究をゆるがすものとして、当事者研究の意義を見出している。その上で、女性学が男性中心の学問研究に挑戦した歴史について述べているものの、2001年以降に誕生した狭義の当事者研究がいかにして既存の学問研究をゆるがしつつあるのかの詳細について述べているわけではない。そこで本論文第二部では、「多数派向けのコミュニケーション様式こそが“中立”なものであり、そこから逸脱した人々をコミュニケーション障害として“客観的”に診断できる」と捉える多数派による自閉スペクトラム症研究の前提を批判し、当事者の視点から自閉スペクトラム症概念を再構築した筆者自身の当事者研究と、多数派のコミュニケーション様式自体を客体化するソーシャル・マジョリティ研究について詳述する。

このように本論文は、既存の学問領域との関連性を記述するものではなく、そもそも研究や知とは何か、という包括的な問いに対して当事者研究という実践を分析することで1つの見方を提示しようとするものである。本論文では、当事者研究における研究史・研究事例・研究方法論の3つを全て取り扱っており、互いにこれらの整合性を取りながら1つの領域を確立しようと試みている。これら3つは、一般に研究分野の骨格をなすものであり、その意味で本論文は、「当事者研究とは何か」を学問的に記述した初の試みである。

なお、第一部における資料は書籍や各団体が発行している報告書が中心となっている。これは当事者活動および当事者研究という在野の実践を記録した方法が、主に書籍や報告書であることによる。

それだけでは足りない資料についてはインターネット上にある各団体のサイトを中心に情報を収集した。こうした資料をもとに筆者が発表した下記の 2 つの論稿に、大幅な加筆を施したものが第一部となっている。

第一部 著作物初出データ（発行年順）

- ・綾屋紗月．(2017b)．当事者研究をはじめよう！——当事者研究のやり方研究．責任編集：熊谷晋一郎．『みんなの当事者研究』（臨床心理学増刊第 9 号）． pp.73-99.
- ・綾屋紗月．(2019a)．当事者研究が受け継ぐべき歴史と理念．責任編集：熊谷晋一郎『当事者研究をはじめよう』（臨床心理学増刊第 11 号）． pp.6-13． 金剛出版.
- ・綾屋紗月．(2020b)．当事者研究に流れる当事者活動の系譜．編著:松本卓也, 武本一美, 『メンタルヘルス時代の精神医学 2』． ミネルヴァ書房．印刷中

また、第二部における資料は、これまで発表してきた筆者自身の当事者研究に関する論稿が中心となっている。また時間を特定できる資料として、筆者自身のブログおよび SNS（ツイッター）からも記録を収集した。第二部の各章は、下記の論稿を組み合わせ、加筆修正した議論となっている。

第二部 筆者著作物データ（章ごとに発行年順）

第 4 章

- ・綾屋紗月．(2009)．『前略、離婚を決めました』． 理論社.
- ・綾屋紗月．(2010c)． 発達障害・アスペルガー症候群当事者 綾屋紗月さんに聞く． Fonte291.
- ・綾屋紗月・熊谷晋一郎．(2010)．『つながりの作法—同じでもなく違うでもなく』． NHK 出版.
- ・綾屋紗月．(2013a)． 当事者研究と自己感．石原孝二編．『当事者研究の研究』． pp.177-216.医学書院.
- ・熊谷晋一郎・綾屋紗月．(2014)． 共同報告・生き延びるための研究．『三田社会学』第 19 号 2014 年 夏． pp.3-19.
- ・綾屋紗月．(2016a)． 当事者研究の展開—自閉スペクトラム症当事者の立場から．『現代思想』44 (17)． pp.160-173.
- ・綾屋紗月．(2016b)． 発達障害の当事者研究—情報保障の観点からの考察．編著:石原孝二、河野哲也、向谷地生良．『精神医学と当事者』． pp.206-224． 東京大学出版会.
- ・綾屋紗月．(2016c)． 当事者として、思うこと．編：金生由紀子・渡辺慶一郎・土橋圭子．『新版 自閉スペクトラム症の医療・療育・教育』． pp.287-297． 金芳堂.
- ・綾屋紗月．(2020a)． 発達障害を生きる—「コミュニケーション障害」の罫から抜け出すために．『こころの科学 SPECIAL ISSUE 2020』． pp.64-71． 日本評論社.

第5章

- ・綾屋紗月・熊谷晋一郎。(2008).『発達障害当事者研究—ゆっくりていねいにつなりたい—』. 医学書院.
- ・綾屋紗月。(2010a). うまく話せない当事者研究. 『現代思想』 38 (12). pp.88-93.
- ・綾屋紗月。(2012). ノリに乗れない. 『精神看護』 15(6). pp.68-73.
- ・綾屋紗月。(2013a). 当事者研究と自己感. 石原孝二編. 『当事者研究の研究』. pp.177-216. 医学書院.
- ・綾屋紗月。(2013b). アフォーダンスの配置によって支えられる自己—ある自閉スペクトラム当事者の視点より. 河野哲也編. 『知の生態学的転回 3 倫理—人類のアフォーダンス』. pp.155-180. 東京大学出版会.

第6章

- ・綾屋紗月・熊谷晋一郎。(2008).『発達障害当事者研究—ゆっくりていねいにつなりたい—』. 医学書院.
- ・綾屋紗月・熊谷晋一郎。(2010).『つながりの作法—同じでもなく違うでもなく』. NHK 出版.
- ・綾屋紗月。(2010a). うまく話せない当事者研究. 『現代思想』 38 (12). pp.88-93.
- ・綾屋紗月。(2010b). 意味づけ介助. 『ノーマライゼーション—障害者の福祉』 30 (1). p.40.
- ・綾屋紗月。(2011a). 痛みの記憶—成長の終わり いまのはじまり. 『現代思想』 39 (11). pp.56-70.
- ・綾屋紗月。(2011b). 気持ち悪い模様 16—気持ち悪い文字その3 『精神看護』 14(5). pp.102-103.
- ・綾屋紗月。(2013a). 当事者研究と自己感. 石原孝二編. 『当事者研究の研究』. pp.177-216. 医学書院.
- ・綾屋紗月。(2013b). アフォーダンスの配置によって支えられる自己—ある自閉スペクトラム当事者の視点より. 河野哲也編. 『知の生態学的転回 3 倫理—人類のアフォーダンス』. pp.155-180. 東京大学出版会.
- ・熊谷晋一郎・綾屋紗月。(2014). 共同報告：生き延びるための研究. 『三田社会学』 第19号 2014年 夏. pp.3-19.
- ・綾屋紗月。(2016a). 当事者研究の展開—自閉スペクトラム症当事者の立場から. 『現代思想』 44 (17). pp.160-173.
- ・綾屋紗月。(2016b). 発達障害の当事者研究—情報保障の観点からの考察. 編著:石原孝二、河野哲也、向谷地生良. 『精神医学と当事者』. pp.206-224. 東京大学出版会.
- ・綾屋紗月。(2016c). 当事者として、思うこと. 編：金生由紀子・渡辺慶一郎・土橋圭子. 『新版 自閉スペクトラム症の医療・療育・教育』. pp.287-297. 金芳堂.
- ・綾屋紗月。(2018). はじめに. 綾屋紗月編著. 『ソーシャル・マジョリティ研究：コミュニケーション学の共同創造』. pp.1-22. 金子書房.
- ・綾屋紗月。(2019d). ソーシャル・マジョリティ研究とは何か. 情報処理 60(10). pp.950-954.

第7章

- ・綾屋紗月・熊谷晋一郎．(2008)．『発達障害当事者研究—ゆっくりていねいにつなりたい—』．医学書院．
- ・綾屋紗月．(2011a)．痛みの記憶—成長の終わり いまのはじまり．『現代思想』39 (11)．pp.56-70．
- ・綾屋紗月．(2013a)．当事者研究と自己感．石原孝二編．『当事者研究の研究』．pp.177-216．医学書院．
- ・綾屋紗月．(2017a)．私と私の二人暮らし．『文藝』(2017年冬季号)．pp.312-313．
- ・綾屋紗月・上岡陽江．(2017)．発達障害と依存症の仲間が交差するところ—私たちのコミュニケーション方法の開拓と継承．『現代思想』45 (15)．pp.161-185．
- ・綾屋紗月．(2019b)．傷を拓く．『臨床心理学』19 (1)．pp.9-14．

第8章

- ・綾屋紗月．(2017b)．当事者研究をはじめよう！—当事者研究のやり方研究．責任編集：熊谷晋一郎．『みんなの当事者研究』（臨床心理学増刊第9号）．pp.73-99．
- ・綾屋紗月．(2019c)．当事者研究を体験しよう！——ワークシートを用いた実践．責任編集：熊谷晋一郎．『当事者研究をはじめよう』（臨床心理学増刊第11号）．pp.88-105．
- ・綾屋紗月・熊谷晋一郎・上岡陽江．(2019)．当事者研究ワークシート実践報告①——薬物依存症当事者研究における実践．責任編集：熊谷晋一郎．『当事者研究をはじめよう』（臨床心理学増刊第11号）．pp.106-116．

さらに、論文発表の承諾を得た関係者にできる限りインタビュー調査をおこなうことで、これまで記述されてこなかった不明点を補うよう努めた。インタビュー調査においては、以下のような倫理的配慮をおこなった。

【A】 以下、インタビューデータにおける①②③④⑤⑦⑪に関しては、撤回の自由、公表前に確認手続きを経てからでなければ公表しないことについて口頭または文書で説明し、承諾を得た。

【B】 以下、インタビューデータにおける⑥⑧⑨⑩⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑳に関しては、氏名・所属・当事者性の公表／非公表の選択の自由、録音・録画データの公表／非公表の選択の自由、論文化した際の公表前確認の要／不要の選択の自由を口頭で説明した上で、書面にて同意を得た。録音・録画データおよび論文の公表前確認を要するとした対象者は、連絡先として住所・電話・Eメールアドレスのいずれかを書面へ記入した。

【A】【B】 を踏まえ、①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑮⑱⑳については、筆者の作成した原稿における事実関係や表現に関して対象者が加筆修正し、筆者および対象者の双方が合意に達した内容を完成稿とした。

対象者の疲労に配慮し、インタビュー調査時間は最大2時間までとした。また、対象者の語りやすさを考慮して、基本的には個別にインタビュー調査をおこなったが、⑥⑧⑨⑩に関しては、対象者の個

個人情報保護が必要な内容ではなく、お互いに連想的に語りが発せられることに意味があると考え、⑥と⑧、⑨と⑩が同席するかたちでグループフォーカスインタビューをおこなった。

①③④⑦⑨⑩⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳については、承諾を得た上で動画および音声の記録をおこない、②⑤⑥⑧⑪については、承諾を得た上で音声記録のみをおこなった。動画および音声記録はすべてトランスクリプトに書き起こし、それらを分析対象とした。

インタビュー・データ

インタビュー・データについては、以下に、対象者・日時・場所の一覧を示し、取材日時順に番号をつける。

- ①向谷地生良 (2016) : 2016年12月11日 18:00-18:25 場所 : 東京大学先端科学技術研究センター 3号館南棟 266室
- ②熊谷晋一郎 (2016) : 2016年12月25日 12:45-14:50 場所 : 熊谷晋一郎自宅
- ③大嶋栄子 (2017) : 2017年11月2日 14:30-16:30 場所 : 東京大学先端科学技術研究センター 3号館南棟 266室
- ④川村敏明 (2017) : 2017年12月2日 9:00-11:00 場所 : 東横イン千葉みなと駅前会議室
- ⑤上岡陽江 (2019a) : 2019年3月14日 16:24-17:02 場所 : 北区滝野川会館
- ⑥上岡陽江 (2019b) : 2019年4月18日 15:24-16:50 場所 : ダルク女性ハウス
- ⑦伊藤建雄 (2019) : 2019年4月23日 10:30-12:30 場所 : 東京大学先端科学技術研究センター 3号館南棟 266室
- ⑧五十公野理恵子 (2019) : 2019年4月18日 15:24-16:50 場所 : ダルク女性ハウス
- ⑨A (2019) : 2019年5月17日 14:30-15:17 場所 : 東京大学先端科学技術研究センター3号館南棟 266室
- ⑩B (2019) : 2019年5月17日 14:30-15:17 場所 : 東京大学先端科学技術研究センター3号館南棟 266室
- ⑪大河内尚之 (2019) : 2019年5月23日 16:08-16:40 場所 : 東京大学先端科学技術研究センター 3号館 501室
- ⑫早坂潔 (2019) : 2019年7月18日 13:00-13:45 場所 : 浦河べてるの家 ニューべてる 2階
- ⑬山根耕平 (2019) : 2019年7月18日 13:50-14:15 場所 : 浦河べてるの家 ニューべてる 2階
- ⑭秋山里子 (2019) : 2019年7月18日 14:20-14:50 場所 : 浦河べてるの家 ニューべてる 2階
- ⑮赤尾悦子 (2019) : 2019年7月18日 16:00-17:45 場所 : 浦河べてるの家 ニューべてる 2階
- ⑯清水里香 (2019) : 2019年7月21日 9:00-10:00 場所 : 浦河べてるの家 カフェぶらぶら
- ⑰N (2019) : 2019年7月21日 10:00-10:45 場所 : 浦河べてるの家 カフェぶらぶら
- ⑱和田智子 (2019) : 2019年7月21日 10:50-11:35 場所 : 浦河べてるの家 カフェぶらぶら
- ⑲山家研司 (2019) : 2019年7月22日 15:30-17:30 場所 : 医療法人北仁会旭山病院院長室
- ⑳小山内美智子 (2019) : 2019年7月23日 13:00-15:00 場所 : 札幌いちご会

本論文の研究遂行においては、第 44 回（平成 25 年度）三菱財団社会福祉助成、文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究「構成論的発達科学」（No.24119006）、基盤研究（C）「当事者研究に基づく自閉スペクトラム症者にとってバリアフリーなコミュニケーション様式の解明」（No.15K01453）、および JST CREST「認知ミラーリング：認知過程の自己理解と社会的共有による発達障害者支援」（課題番号：JPMJCR16E2）の助成を受けた。感謝を申し上げたい。

第一部 当事者活動における当事者研究の歴史的位置づけ

第1章 力を取り戻す：難病患者・障害者運動の系譜

北海道の浦河町では 1939 年に日本赤十字社北海道支部浦河療院が開院し、移管、改称を重ねたのち、1959 年に浦河赤十字病院精神科が開設され（日本赤十字社 浦河赤十字病院、n.d.）、浦河町の精神医療の中心を担ってきた。それは医療が「精神障害者のあらゆる生活の局面を把握し、かかわり、援助するという『地域の監督者』の役割を肥大させてきた」ということでもあったと向谷地は述べる。向谷地によれば、こうした浦河の状況を変容させるきっかけとなったのが、「エンパワメント・アプローチ」と「アディクション・アプローチ」という 2 つの視点であり、それらのアプローチによって、べてるでは当事者と支援者が「連携」し、また、支援者は従来の「役割の再構築をはかってきた」という（向谷地、2009a、pp.77-78）。

後述するように、この 2 つのアプローチはそれぞれ、障害者および依存症者の活動から多大な影響を受け、それまでの専門家主導の治療的介入から脱却しようとした支援方法である。本論文の目的は、向谷地のこの記述を手がかりにしつつも、専門家視点による支援アプローチの歴史ではなく、先行する当事者による活動の歴史の中に、当事者研究という実践を位置づけることによって、それまでの当事者活動実践のどのような理念や方法を、当事者研究が受け継いできたのかを明らかにすることである。したがって第一部では、エンパワメント・アプローチやアディクション・アプローチというよりも、それらに影響を与えた障害者および依存症者の活動にまで遡り、それぞれどのようなものだったのか、そして、どのようにべてるの活動に導入され、その後の当事者研究の誕生へとつながっていったのかを詳述する。

第2章 無力を認める：依存症自助グループの系譜

第1章では、ソーシャルワーカーの向谷地が大学時代に触れた難病患者・障害者運動について、本来の力を過小評価され、無力化させられてきた人々が、力を取り戻すための運動であったことを述べた。そして、そのような意味でのエンパワメントの視点を以って浦河での支援を開始した向谷地が、アルコール依存症者にはそれが通用しないという無力感を味わうことになった経緯を追った。

続く本章では、同じく当事者研究に影響を与えた当事者活動の系譜のうち、アルコール依存症者の当事者活動である AA の系譜を辿る。その際、向谷地と並ぶもう一人のべてるの中心的な支援者である精神科医の川村が取り組んだ、AA をはじめとする依存症の自助グループとの連携体制を持つアディクション治療の変遷についてもふれる。川村の著作物は少ないため、本章第2節、第3節では、①川村へのインタビュー、②川村が勤務した医療法人北仁会旭山病院にて川村と共に勤務した経験を持ち、現在、同病院の院長である山家研司（以下、山家）へのインタビュー、③同病院にてソーシャルワーカーとして勤務したのちに、女性のための福祉支援施設である「それいゆ」を設立した、川村および向谷地と親交の深い大嶋栄子（NPO 法人リカバリー代表 以下、大嶋）、④浦河の AA に通っていた赤尾悦子（以下、赤尾）へのインタビューを主な対象データとし、これまで描かれてこなかった浦河におけるアディクション史の初の詳述を試みる。

第3章 当事者研究の誕生：2つの当事者活動の系譜の合流

第3章では、第1章で見た難病患者・障害者運動の系譜と、第2章で見たアルコール依存症者の自助グループであるAAの系譜が、どのようにべてるで出会い、当事者研究の誕生に至ったのかを概観する。難病患者・障害者運動とAAは、どちらも当事者が中心となって当事者を支援する活動である。しかし、障害者運動が奪われた力を取り戻し、社会変革を目指すのに対して、AAでは自分の無力をみとめ、社会に意見をもたないことを旨とするなど、互いに相容れないように見える要素もある。このような当事者の「力」という観点では正反対のように思われる両実践が合流していく経緯をみていく。さらに本章の最後となる第4節では、第一部と第二部をつなぐ当事者研究誕生後の重要な展開の1つとして、薬物依存症者回復施設の1つであるハウス（ダルク女性ハウス）における当事者研究のはじまりについて述べることで、当事者研究という実践は、従来の当事者活動の中で取りこぼされ、周縁化された人々にとって不可欠なツールであったことを述べる。

第二部 周縁者としての自閉スペクトラム症者の当事者研究

第4章 障害者運動から見た自閉スペクトラム症概念批判

第二部のはじめとなる第4章では、第一部でみたように、当事者研究を「当事者活動において周縁化された当事者の潜在的ニーズに応える可能性を秘めたもの」としてとらえ、それを応用した一例として、筆者がおこなってきた自閉スペクトラム症の当事者研究に視点を移し、まずは、当事者研究に出会う以前の筆者の個人史について述べる。筆者は幼少期以来、理由のわからない周囲とのズレを突きつけられ続け、混乱の中を生きてきたが、周囲との差異や抱えている困難を可視化してくれる「自閉スペクトラム症」という診断名を得たことによって、生きやすさがもたらされた。しかし同時に、筆者は自閉スペクトラム症概念が持つ問題に気づくことになる。自閉スペクトラム症は、国際的な診断基準である DSM-5 によって、1) 様々な文脈を超えて、全般的な発達の遅れでは説明のつかない、社会的コミュニケーションと社会的相互作用における持続的な欠損 (persistent deficits in social communication and social interaction across multiple contexts) があり、2) 行動、興味、活動の限局的かつ反復的なパターン (restricted, repetitive patterns of behavior, interests, or activities) が認められる、という2つの特徴で定義されている (APA, 2013)。ここで指摘したいのは、個人の特徴を記述するはずの診断名において、他者とのコミュニケーション上の障害を中核的な特徴として定義していることである。そのため、他者との「間」に起きる一過性の現象としてのコミュニケーション障害が、あたかも、個人の「中」にある永続的な特徴であるかのような誤解を与えかねないものとなっているのである。このことは障害者運動全体を貫く社会モデルの視点が未だ十分に自閉スペクトラム症においては取り入れられていなかったことを意味している。

こうして筆者は診断を得て既存の医学的なカテゴリーに救われつつ、それとほぼ同時期に障害者運動や社会モデルの考え方に出会ったことにより、この自閉スペクトラム症概念の論理的な問題に直面した。そのため、障害者運動の視点からの批判を加えるかたちで、筆者の当事者研究は始まることになる。本章ではその経緯を詳述する。

なお第二部では、本論文の執筆者としての筆者と、本論文の研究対象としての筆者を可能な限り分離する試みとして、後者の呼称を「綾屋」と表記していく。

第5章 身体的自己感の当事者研究

自閉スペクトラム症概念を社会モデルの視点から再構築し、障害者運動の系譜の中に再配置するためには、コミュニケーション障害という人と人との「間」の現象を、個人に帰属しうる特徴として記述するようなこれまでのやり方を否定し、対人関係以前に筆者が永続的に状況を超えて持ち続けている経験の構造を詳細に記述しなおす必要があった。こうした永続的な経験構造には、個人に帰属しうる筆者の身体の特徴が露わになっていると考えられる。従ってそれは筆者の「身体的自己感」を確かなものにしようとする当事者研究であるとも言える。第5章では、筆者のこれまでの当事者研究のうち、身体的な特徴について分析する。

第6章 自己身体を基点とした社会変革としての情報保障

第5章では自閉スペクトラム症の診断を得た筆者の身体的特徴について明らかにする身体的自己感の当事者研究について述べ、身体的自己感を得ることが筆者に自己身体を基点とする生きやすさをもたらしてきたことをみてきた。しかし残念ながら、これで筆者のすべての生きづらさが解決するというわけではない。たとえ正確な自己感を獲得したとしても、その自己感を否定しない環境はどのようなものか、という重要な視点が残るからである。

第一部で見た当事者研究に注ぐ当事者活動の2つの系譜の合流について振り返るならば、努力では変えられない自分の身体的特徴の限界である「無力さ」を自覚したあとに待ち受けているのは、「誰にも頼らず一人で全てをやりとげられる」という思い込みを捨て、べてるの当事者研究の理念の1つである「弱さを絆に」という言葉のとおり、他者とつながり、他者からの支援を得ながら生きていくために、社会環境側を具体的に变えるよう要求していくことだと考えられる。

そこで、続く第6章では、第5章で見出した身体的特徴を踏まえ、社会にどのような変化をもたらすことが筆者の生きやすさにつながるのかについて、情報保障という観点から述べていく。対人関係上の困難をこれまでのように筆者の側に帰属されるコミュニケーション障害という概念で説明するのではなく、多数派の身体的特徴に合わせてデザインされた記号表現や相互行為を問い直し、少数派の身体的特徴をもつ者にとって、参入しやすい情報デザインやコミュニケーションルールを考案する情報保障という考え方は、これまで視覚障害や聴覚障害の領域で広まってきた、社会モデルに基づく支援法である。これを、自閉スペクトラム症にも応用することで、社会モデルに基づく自閉スペクトラム症支援を提案しようとするのが本章の目的である。ただし視覚障害や聴覚障害に比べ、自閉スペクトラム症の場合、多数派向けのコミュニケーションデザインのどの部分が障壁になっているのかについて、当事者にとってさえ自明でないことが多い。こうした問題に取り組むため、「多数派向けのコミュニケーションルール」がどのような仕組みになっているかを当事者の素朴な日常的疑問から出発して、さまざまな分野の研究者とともに考える、「ソーシャル・マジョリティ研究」という取り組みについても述べる。

第7章 置き去りにされた過去と歴史的自己感の当事者研究

第5章で述べたように、綾屋は当事者研究によって、まず、これまで語るこののできなかつた混沌とした自分の経験のうち、周囲の多くの人々とは異なる、固有の身体的特徴を反映していると思われる反復する経験の構造を明らかにすることができた。そして、そのような自分のことを「身体的自己感」と呼んだ。身体的自己感の確立によって自分自身に生じるパターンを把握し、自分の身体的反応や他者との違いに対して頻繁に驚かずに済むようになり、他者に対して自身を説明する言葉も得ることができたのである。更に第6章で詳述したように、そのようにして把握した身体的特徴を踏まえて、自分にとって暮らしやすい社会環境の条件を提案することも試みてきた。

しかしその後、新たな苦しみとして到来したのは、やっと手にした安心できる現在をただ穏やかに淡々と生きていこうとしているにもかかわらず、しばしば、つらかった過去の世界へ突然引き戻され、

もだえ苦しむ現象が日常を著しく妨害することだった（綾屋・熊谷、2010、pp.209-210）。本章では、こうした過去の記憶をめぐる当事者研究の過程を記述していく。結論を先取りするならば、この過去が現在を侵食する現象は、身体的自己感の発見と共有を経てもなお、あいかわらず過去の傷ついた経験の記憶が、意味づけできないまま放置され続けたために生じており、過去の意味づけ介助を行ってくれる他者との出会いによって、ようやくそうした傷の記憶を自分の生きてきた歴史の中に位置づけることができた。第5章では、経験に予測や見通しを与えるパターンからはずれた、1回性のエピソードの束を「歴史的自己感」と定義したが、パターンからどれほどはずれているかは、エピソードによって異なる。大きくはずれたエピソードは、トラウマ記憶として歴史的自己感の一部に十分に組み込まれることなく、フラッシュバックを引き起こす。そのような、パターンから大きくはずれているがゆえに長期に渡って疼き続けた傷の記憶を、歴史的自己感の一部として再統合しようとするのが、本章で述べる当事者研究の目的である。

とはいえ、第5章で取り組んだ身体的自己感のまとめあげは、歴史的自己感のまとめあげを部分的には後押しした。本章では第1節で、身体的自己感のまとめあげが歴史的自己感に与えた影響について述べる。そして第2節では、それでもなお十分にまとめあがらなかった歴史的過去が、過去の意味づけ介助をしてくれる他者と出会うことを契機にまとめあがっていく経緯を述べる。

第三部 当事者研究の方法論的検討

第8章 未来に向けて：当事者研究を仲間に伝える実践

第一部では、「当事者活動における当事者研究の歴史的位置づけ」を論じ、第二部では、筆者による「周縁者としての自閉スペクトラム症者の当事者研究」を詳述した。以上を踏まえ、第三部、最終章となる本章では、当事者研究の方法論について述べる。ここで当事者研究の方法論をとりあげる理由には、主に3つある。

1つめの理由は、これから当事者研究をはじめようとする当事者、および、当事者研究のファシリテーターに挑戦しようとする当事者や現場の支援者から寄せられる、「どのような手順で、何について考えて進めていけば、当事者研究が成立していることになるのかわからないので、当事者研究の方法を教えてほしい」というニーズの増加である。本論文では冒頭で、当事者研究にはいわゆる決まった手順はなく、テーマ設定も研究方法も「基本的に自由」（べてるしあわせ研究所、2009、p.45）であり、その堅苦しくない気軽な雰囲気も魅力となっており、日本全国だけでなく海外にも広まっていることを述べた。しかしその広まりとともに、勘のいい人や長い経験を重ねた人だけが、うまく当事者研究のファシリテーションをおこなってミーティングを仕切ることができるという現状が問題として露わになってきた。そこで、より多くの初心者が当事者研究を実践できるようになるためのプログラムもまた、求められはじめたのである。

2つめの理由は、AAの歴史を振り返ったときに自覚される、当事者活動の理念や方法を明文化することの重要性である。第2章第1節第1項でも見たように、AA設立後4年という短期間のうちに「回復のプログラムの骨子」を明示化して出版物『アルコールクス・アノニマス（ビックブック）』を出版したことから、AAメンバーは「回復の方法」と「組織として生じるさまざまなニーズ」を把握できるようになった。これはAAからさかのぼること約100年前に創設した、アメリカ史上初のアルコール依存症者によって組織された相互扶助団体であるワシントンニアン協会が、一度は「メンバー数が60万人もの数に」膨張したにもかかわらず、その後、「目新しさと情緒的感興が醒めると」簡単に「消滅した」と対照的である。ホワイトによれば「ブラムバーグ（Blumberg）とピットマン（Pittman）は、AAが成功したのは、創設後の成長速度がかなりゆるやかだった」ため、「初期の頃の過ちを自己修正でき、急速な成長に向かう前に、AAの理念やアプローチの方法を1冊の本に書き記すことができた」ことも「理由の1つ」であると述べているという（ホワイト、2007、pp.13-14, pp.153-154）。このような先行く仲間の歴史を振り返っても、今後、当事者研究が単なるブームで終わらないためには、べてるをはじめ、それぞれのグループで試行錯誤しながら進められてきた当事者研究において長年大切に積み重ねてきた理念、実績、仲間の知恵、および、それらを土台として行われる具体的な形式や進行方法の事例を記録・分析し、多様な在り方や、共通する要素を後世に伝えていくことが、眼前に差し迫った課題だと思われる。

3つめの理由は、当事者研究を1つの研究領域として打ち立てていくためには、他の研究領域と同様、その方法を論じることが避けられないというものである。方法が記述されないまま、産出された知識を提出しただけでは、それについて妥当性等を論じることができないだろう。

以上のような問題意識を、長年さまざまな領域で当事者研究を実践してきたメンバー同士で共有した結果、第3章で述べた「当事者研究のやり方研究会」において方法論の検討がなされた。具体的に

は、べてるとハウスの当事者研究の形式や進行方法の共通点を見出す作業に取り組んだ。本章では、当事者研究自体を具体的に進める方法論を明らかにし、当事者研究の伝承可能性（transferability）を高める筆者の取り組みである「当事者研究ワークシート」を紹介する。

おわりに

本論文の締め括りにあたり、本論の要約を述べ、本論の意義を考察し、今後の展望を示す。

本論文の要約

本論の第一部では、難病患者・障害者運動と、依存症自助グループという2つの当事者活動の系譜に大きな影響を受けつつ当事者研究が誕生したこと、そして、それぞれの系譜に背中を押されつつもそこから周縁化された当事者にとって、この二大潮流の合流が必要だったことを見てきた。難病患者・障害者運動が重視した「奪われた力を取り戻すこと」とは可変性の範囲の認識的拡大、依存症自助グループが重きを置いた「無力さを認めること」とは不変性の範囲の認識的拡大とみなすことができ、そしてこの可変の範囲、不変の範囲を時間軸上に展開すれば、前者は未来、後者は過去におおまかに対応づけることができよう。こうして、力／未来に力点を置く難病患者・障害者運動と、無力／過去に力点を置くAAの対比を確認することができる。そして当事者研究は、「研究」という概念のもと、依存症自助グループのように過去の正直な振り返りを重視しつつも、難病患者・障害者運動のようにそれを未来の実験につなげ、公開していくという、独自の実践として両方の特徴を矛盾なく継承していったのである。

当事者研究が当事者活動に影響を受けつつも、当事者活動によって周縁化された当事者の潜在的ニーズに応える可能性を秘めたものであるとするならば、現代社会において、当事者活動から周縁化されがちな人々の困難に対して、当事者研究を応用していこうと考えるのは自然な展開と言える。第二部でとりあげた、自閉スペクトラム症を含む発達障害者とは、まさに、そのような人々の一例である。

そこで第二部では、筆者がおこなってきた自閉スペクトラム症の当事者研究を分析し、それが当事者活動や当事者研究にもたらしたものを考察した。その結果、筆者の当事者研究もまた、第一部で述べた、二大当事者活動の影響を受けつつ進んでいったことが確認された。筆者の当事者研究は難病患者・障害者運動に導かれつつ、社会モデルに基づく自閉スペクトラム症概念を再構築し、社会変革の具体的提案のいくつかをおこなった。また、社会変革によって生きやすくなればなるほど置き去りにされる「傷ついた過去の自分」と共に生きていくためには、依存症自助グループの理念と実践が不可欠であることが確認された。そして第三部では、第一部で述べた「当事者活動における当事者研究の歴史的 positioning」、および、第二部において述べた筆者による「周縁者としての自閉スペクトラム症者の当事者研究」を踏まえた、当事者研究の方法論について述べた。

本論文の意義

次に本論文の意義について述べる。本論の意義は、研究史としての意義、研究事例としての意義、方法論としての意義の3点から説明できるだろう。

まず研究史としての意義だが、本論文では当事者研究の誕生の経緯を、当事者活動から当事者研究が生まれるまでの歴史に特定して辿り、難病患者・障害者運動と依存症自助グループという2つの当事者活動の系譜の中に当事者研究を定位することを新たに試みた。それによって「当事者による、当事者のための当事者研究」という位置づけを明確にした。また第2章において、これまで描かれてこなかった浦河にAAが運ばれた歴史的経緯を明らかにするなど、浦河におけるアディクション史の初の詳述したことも、本論の重要な意義だと言えるだろう。

次に、研究事例としての意義だが、第二部で展開した筆者の当事者研究は、これまでの当事者活動や当事者研究の蓄積に、3つの新しい要素を付け加えた。1つめは、筆者の当事者研究が、自閉スペクトラム症の診断基準を問い直す地点から出発し、自身の情報保障の方法にまでたどりついた点である。これは個人の不変性としてコミュニケーションのすれ違いを一方向的に押しつける個人モデルから、環境の可変性を示す社会モデルへと転換させるという点で、障害者運動の系譜を踏襲しつつも、それを自閉スペクトラム症に拡張したこれまでにない試みであった。またこの取り組みは、自閉スペクトラム症についての専門知への批判であるとともに、あらゆる当事者コミュニティが自らの価値や理念に沿わないメンバーを排除する際に自閉スペクトラム症概念を安易に用いることへの問題提起にもなっているとと言えるだろう。2つめとして、とりわけ身体的自己感が明確な段階にない当事者にとって、過去を振り返る作業に先行して、身体的自己感を知り、安全な社会環境を実現する段階が必要であることの論理的根拠を示した点である。安全な現在がなければ、現在と切り離されたものとして過去を振り返るという作業自体が不可能になるのである。3つめは、筆者の当事者研究が、筆者の心身の感覚や時間感覚の変化を10年以上という長期に渡って記録し続け、そのデータを基に記述されたという点である。これまでの当事者研究ではここまで詳細に、外界からは見えにくい身体的自己感を理論的に描いたものはなかった。また、歴史的自己感においても、特に第7章では、傷を負った過去の記憶と辛抱強く向き合う態度において依存症の自助グループの系譜を踏襲しつつも、これまでの当事者研究にはないほど、歴史的自己感における長期的な変化を、時系列に沿って緻密に描いた。その2点において、筆者の当事者研究は、当事者研究の新しい歴史を刻んだと言えるだろう。こうしてみると、第二部で述べた、自閉スペクトラム症という周縁者の一人である筆者個人の当事者研究もまた、第一部でみてきた難病患者・障害者運動と依存症の自助グループの系譜を踏まえつつも、そこにいくつかの要素を付け加えており、当事者活動の歴史の中に筆者個人の当事者研究を位置づけることができるだろう。

そして、研究方法論としての意義だが、そもそも当事者研究の方法論はこれまで述べられてこなかったため、第三部で当事者研究の研究方法論を特定したこと自体が画期的だと言えるだろう。特に、当事者研究を伝承可能なものにするために、当事者研究において探究する対象を、「身体的自己感」と「歴史的自己感」の2つとして具体化した。このことは、これらの自己感に基づいて当事者研究の研究方法を論じることを可能にするものと思われる。しかし同時に、本論文で述べた方法論が、浦河での実践を含む当事者研究全体にも反映できるかどうかは定かではないことにも言及しておかねばならない。また当事者研究の歴史の中に根付くかどうかはこれからの仲間によるところが多い。

このように本論文では、当事者研究における研究史・研究事例・研究方法論の3つを全て取り扱っており、互いにこれらの整合性を取りながら1つの領域を確立しようとした点が新たな試みであった。これら3つは、一般に研究分野の骨格をなすものであり、その意味で本論文は、「当事者研究とは何か」を学問的に記述した初の試みだと言えるだろう。今後の批判の布石となり、当事者研究の骨格がより精練されていくことを期待したい。

本論の限界

第一部において当事者研究における当事者の系譜を辿るにあたり、筆者は、当事者との連携をもたらしたアプローチとして向谷地が挙げている「エンパワメント・アプローチ」と「アディクション・アプローチ」の2つを唯一の手がかりとして、それらの上流を辿るかたちで調査を進めていった。しかし向谷地による言説資料は豊富だが、それ以外の人物による資料は著しく乏しく、散在した資料を断片として収集したものの、それらを結んで当事者の系譜として一筋の道を作るために必要な、多くの資料が存在しなかった。そこで関係する当事者および専門家にインタビュー調査をすることでようやく、空いた隙間をつなぐような、これまで存在しなかった数々の貴重なデータを入手することができた。こうして、これまで書かれてこなかった当事者研究における当事者の系譜を、点から線へと開拓したことには本論の価値があると考えており、また、その希少性の高さからインタビュー・データを少しでも多く公開することを重視した。とはいえ、本来インタビュー・データは、語られたことをそのまま真実として扱ってよい資料ではないこと、また、インタビューの語りを羅列するだけでは歴史的分析にならないことも承知している。そのような意味で本論が、多角的な視点から歴史的事実を確認していくという作業において、なお不十分さを残していることは否めない。

また本論は、あくまでも当事者研究の系譜を辿ることに目的を絞ったため、他の学術研究との比較や他国の当事者活動との国際的な比較によって、当事者研究を定位するような研究には至らなかった。こうした比較研究をおこなうことも今後の課題だと言えるだろう。

今後の展望

最後に今後の展望について述べる。国際的な課題としては、本論で新たに得た「当事者活動の系譜を持つ当事者研究」という視点をもって海外に発信することが挙げられる。それによって海外で当事者活動を行う障害者たちとネットワークを作ることや、当事者との共同創造（コ・プロダクション）に関心を持つ学術研究者たちと共同研究を行うことが目指される。これは、上記で本論の限界として述べた比較研究という課題にも、今後、継続して取り組むことを意味している。

また国内における課題としてここでは2点挙げる。1つは当事者へのアウトリーチである。第5章以降において触れてきたように、筆者は2011年8月以降、発達障害成人当事者のための当事者研究会を継続してきた。2019年8月時点で、計159回、参加者の延べ人数は3,246人に上る。1回の研究会は2時間で、参加者は約14-17名である（定員17名）。毎回、「会話の中で意味がすれ違う」や『声は聞こえても意味が聞こえない』ってどんな感じ?』といったテーマを設けて、前半の1時間はテーマに関連した経験や思いを全員が語る「テーマ研究」と呼ぶプログラムを行い、後半の1時間では、参加者のうち1名がいま抱えている苦勞について研究し、他の参加者はその応援をする「かけこみ当

事者研究」と呼ぶ個人研究のプログラムを行っている。前半のテーマ研究では毎回同じように繰り返される形式的な司会進行が可能だが、後半の個人研究では、語られる内容に応じて臨機応変なファシリテーションが必要になる。会を始めた当初は筆者自身、臨機応変なファシリテーションをすることができなかつたため、テーマ研究のみを行っていた。しかし「言いつばなし聞きつばなし」という限定した形式ではあるものの、長期に渡って仲間とのやりとりを継続して丸3年がたった頃、いつの間にか筆者の身体特性に合わせた形で個人研究のファシリテーションができるようになっていた。そして4年目から個人研究である「かけこみ当事者研究」を始めることになるが、次に筆者に生じたのは「このようなやり方でベテランやハウスが大切にされて来た当事者研究のエッセンスからはずれていないだろうか」という不安だった。本論文の第一部と第三部は、そのような不安に動機づけられて、この3年間、研究を重ねてきた成果でもある。本論文を書き上げつつある今、ファシリテーションにおいて、はずしてはならないエッセンスが見えてきたことによって、当初の不安は解消されつつあるように思える。このように本論文の内容は、当事者研究会全体の司会進行や個人研究のファシリテーションを行うという実践的な意義も持っているということを、筆者は身をもって実感してきた。

筆者が運営する当事者研究会では7月に、研究会の進め方を見直す目的で、1年間の活動を振り返る運営ミーティングを年1回実施している。2017年7月3日におこなわれた運営ミーティングでは、6年目（2016年8月-2017年7月）の1年間、主催者が一人で運営を行っていた現状に対し、「司会の負担が大き過ぎるのではないか」「簡単な役割をシェアできたら手伝いたい」「主催者がつぶれないか心配」「参加者に任せて会を守っていくのも大事」という参加者からの声が聞かれた。それを受けて7年目となる2017年8月からは、参加者が読み上げるだけで進行が担えるような会独自の司会進行マニュアルを作り、参加者に任せるようになった。そのお陰で、筆者の負担はずいぶん減少し、テーマ研究および個人研究のファシリテーションに専念することができるようになった。

さらに、2019年7月1日におこなわれた運営ミーティングでは、後半の個人研究のファシリテーションについても、「練習してファシリができるようになりたい」「やり方を話し合ったり学ぶ機会があると初めての人もやりやすいかも」「工夫・気をつけていることを知りたい」「マニュアルがあると安心」など、ファシリテーション方法を学びたいという声が多く上がった。大きな課題ではあるが、第三部でも触れたグループ内の平場の関係を実現する上では、ファシリテーターと参加者の役割が固定されているよりも、なるべく多くの参加者が気軽にファシリテーション役割を負えるような仕組みを整える必要があるだろう。既に述べたように、後半の個人研究のファシリテーションには、本論文の内容を知識として得ることが望ましいと筆者は考えているが、論文の形式では、こうした知識にアクセスできない当事者は少なくない。今後は、映像の活用や実践的なワークショップなど、本論文の内容をより多くの当事者に伝えていくための方法を探求していく予定である。

もう1つは当事者を取り巻く社会環境としての企業に向けたアウトリーチである。先述した筆者が主催する当事者研究会の参加者からは常々、学校や企業など多数派向けにできた社会環境とのミスマッチによって生じている苦勞が多く語られてきた。第6章で筆者がおこなった環境への社会モデル的なアプローチを踏まえると、当事者研究会に閉じた形で本論文の内容を共有するだけでなく、その外側に広がる社会に向けて公開することで、社会側の変革をすすめて行く必要があると言えるだろう。これは第一部で述べた、依存症自助グループAAの方針と当事者研究の大きな違いの1つでもある。

幸いなことに、一部の企業の中では、障害の有無にかかわらず、社員一人ひとりの可能性を発揮しやすい職場づくりへの関心が高まってきており、理想の職場環境に関するさまざまな実践や研究が蓄積され始めている。たとえば先行研究では、自ら率先して弱さを開示する謙虚なリーダーシップ (humble leadership) によって、社員の創造性 (creativity) が促進されると報告されている。そして、失敗とは組織全体の構造が持つ課題から生じるものである、と全員が受けとめ、失敗を個人に帰責して罰することなく改善策を研究する「心理的安全性 (psychological safety)」が職場に備わっている時に、社員の創造性は促進・発揮されるとも言われている。加えて、心理的安全性のそうした効果は、社員一人ひとりがバラバラに研究するのではなく、共同研究をしたときにより一層高まることも知られている (Wang et al., 2018)。

企業が到達した謙虚なリーダーシップ、心理的安全性、共同研究という概念は、言葉遣いは違うとはいえ、本論文で述べた当事者研究の理念と相通ずる部分大きいと言えるだろう。実際、第3章で詳述したように、当事者研究が誕生した背景には「商売をする」というモチベーションが存在していたので、このことは不思議なことではないかもしれない。当事者研究が継承すべき公開性と社会変革という要素を踏まえた時、本論文の宛先は、狭い意味での障害を持った当事者だけではなく、企業や学校といった、彼らを取り巻く社会環境にも向けられなくてはならない。今後は企業や学校など、さまざまな領域の人々にも届く表現へと本論文の内容を翻訳し、伝えていく必要があると言えるだろう。

付録 当事者研究ミーティングの基本情報

表 1 当事者研究を行う際の基本設定比較 (2017年現在)

団体名 (参加者の持つ 主な特徴) 研究活動歴	開催場所	開催 頻度	人数(名)	テーマの 決め方	参加者の 集め方	必要 アイテム	進行役	研究成果の 主な発表方法
A. べてるの家 (統合失調症) 16年	自施設内	週1	10~20	【個人研究】 研究をする参加 者を中心に決め る	メンバー (利用者)の中 で参加したい 人がやってくる	・ホワイトボード ・ペン ・理念のポスター ・マイク ・スピーカー	・健常者スタッフ ・当事者スタッフ	・書籍・雑誌 ・WEB・テレビ・ ラジオ ・講演 ・論文・学会 ・当事者研究 交流集会 ・浦河楽会
B. ダルク 女性ハウス (薬物依存症) 10年	自施設内	年2 程度 (約5回 で1セッ ト)	5~8	【テーマ研究】 施設運営の中で 浮上してきた、 仲間同士でわか らないこと／必 要なことを、当 事者スタッフが テーマに 設定する	そのとき設定し たテーマによる 研究が必要な メンバー(利用 者)たちに声を かける	・付箋 ・模造紙 ・ペン ・ホワイトボード ・お茶 ・お菓子	・当事者スタッフ (施設長を含む)	・書籍・雑誌 ・パンフレット ・講演 ・論文・学会 ・当事者研究 交流集会

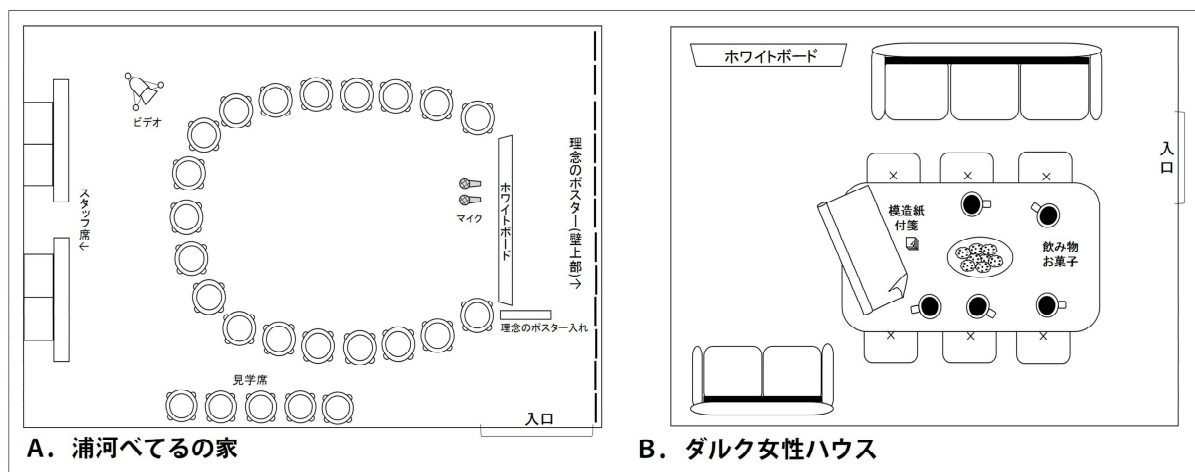


図 1 当事者研究を行う際の配置比較 (2017年現在)

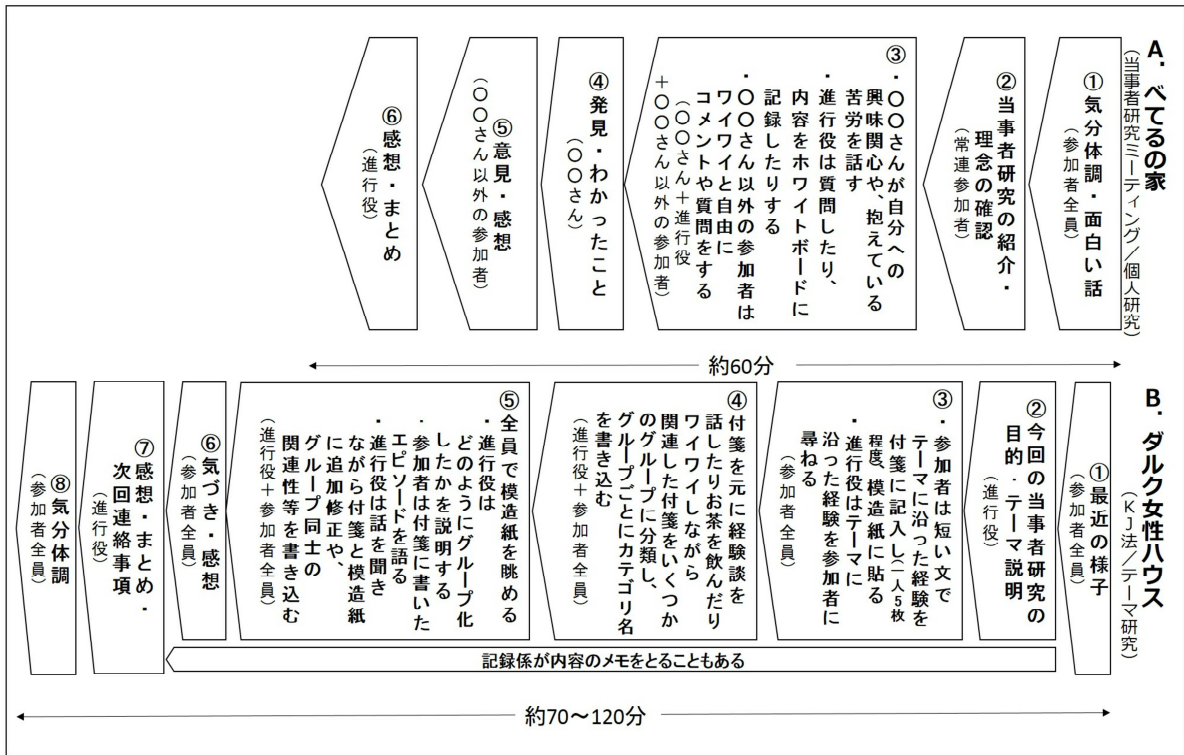


図2 当事者研究を行う際の進行手順比較
 (2017年現在。平均的な進行手順であり、詳細は状況によって変化する)

文献表

- APA (American Psychiatric Association) . (2013). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 5th ed. . APA.
- Baird, G., Simonoff, E., Pickles, A., Chandler, S., Loucas, T., Meldrum, D., & Charman, T. (2006). Prevalence of disorders of the autism spectrum in a population cohort of children in south thames: the special needs and autism project (SNAP). *Lancet*, 368.
- Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative Research in Psychology*, 3(2), 77–101.
- British Dyslexia Association. (2012). 参照日：2016年3月31日，参照先：Dyslexia Style Guide: http://www.bdadyslexia.org.uk/common/ckeditor/filemanager/userfiles/About_Us/policies/Dyslexia_Style_Guide.pdf
- Brugha, T. S., McManus, S., Bankart, J., Scott, F., Purdon, S., Smith, J., . . . Meltzer, H. (2011). Epidemiology of Autism Spectrum Disorders in Adults in the Community in England. *Archives of General Psychiatry*, 68, 459-465.
- Center for Disease Control and Prevention. (2009). Prevalence of autism spectrum disorders - autism and developmental disabilities monitoring network United States, 2006. Surveillance Summaries, 58, 1-20.
- Daluwatte, C., Miles, J. H., Christ, S. E., Beversdorf, D. Q., Takahashi, T. N., & Yao, G. (2013). Atypical Pupillary Light Reflex and Heart Rate Variability in Children with Autism Spectrum Disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 43, 1910–1925.
- Dejong, G. (1979). *Independent Living: From Social Movement to Analytic Paradigm*. Archives of Physical Medicine and Rehabilitation 60.
- Garfield, S. (2010, 10 20). *What's so wrong with Comic Sans?* Retrieved 8 27, 2019, from BBC NEWS: <https://www.bbc.com/news/magazine-11582548>
- Greenaway, R., Davis, G., & Plaisted-Grant, K. (2013). Marked Selective Impairment in Autism on an Index of Magnocellular Function. *Neuropsychologia*, 51, 592-600.
- Kadesjö, B., Gillberg, C., & Hagberg, B. (1999). Brief report: autism and Asperger syndrome in seven-year-old children: a total population study. *J. Autism Dev. Disord*, 29, 327-331.
- Keyes, K., Susser, E., Cheslack-Postava, K., Fountain, C., Liu, K., & Bearman, P. (2012). Cohort effects explain the increase in autism diagnosis among children born from 1992 to 2003 in California. *International Journal of Epidemiology*, 41(2), 495-503.
- Kim, Y. S., Leventhal, B. L., Koh, Y. J., Fombonne, E., Laska, E., Lim, E. C., . . . Grinker, R. R. (2011). Prevalence of autism spectrum disorders in a total population sample. *Am. J. Psychiatry*, 168, 904-912.
- King, M., & Bearman, P. (2009). Diagnostic change and increased prevalence of autism. *International Journal of Epidemiology*, 38, 1224-1234.
- King, M., Fountain, C., Dakhllallah, D., & Bearman, P. (2009). Estimated autism risk and older reproductive age. *American Journal of Public Health*, 99, 1673-1679.
- Kogan, M., Blumberg, S., Schieve, L., Boyle, C., Perrin, J., Ghandour, R., . . . van Dyck, P. (2009). Prevalence of parent-reported diagnosis of autism spectrum disorder among children in the US, 2007. *Pediatrics*, 124, 1395-1403.
- Lin, I. F., Mochida, T., Asada, K., Ayaya, S., Kumagaya, S., & Kato, M. (2015). Atypical Delayed Auditory Feedback Effect and Lombard Effect on Speech Production in High-Functioning Adults with Autism Spectrum Disorder. *Frontiers in Human Neuroscience*, 9, 510.
- Liu, K., King, M., & Bearman, P. (2010). Social influence and the autism epidemic. *American Journal of Sociology*, 115, 1387-1434.
- Lombardo, M. V., Chakrabarti, B., Bullmore, E. T., Sadek, S. A., Pasco, G., Wheelwright, S. J., . . . Baron-Cohen, S. (2010). Atypical neural self-representation in autism. *Brain*, 133, 611–624.

- Mazumdar, S., King, M., Liu, K., Zerubavel, N., & Bearman, P. (2009). The spatial structure of autism in California, 1992-2001. *Health and Place, 16*, 539-546.
- Milne, E., Griffiths, H., Buckley, D., & Scope, A. (2009). Vision in Children and Adolescents with Autistic Spectrum Disorder: Evidence for Reduced Convergence. *Journal of Autism and Developmental Disorders, 39*, 965-975.
- Oliver, M. (1990). *THE INDIVIDUAL AND SOCIAL MODELS OF DISABILITY*.
- Simon, B. L. (1994). *THE EMPOWERMENT TRADITION IN AMERICAN SOCIAL WORK : A History*. New York: Columbia University Press.
- Solomon, B. B. (1976). *Black Empowerment: Social Work in Oppressed Communities*. New York: Columbia University Press.
- The Union of the Physically Impaired Against Segregation(UPIAS). (1976). *Fundamental Principles of Disability*. London: The Union of the Physically Impaired Against Segregation.
- Verhoeff, B. (2012). *What is this thing called autism?* London: BioSocieties.
- Wang, Y., Liu, J., & Zhu, Y. (2018). Humble Leadership, Psychological Safety, Knowledge Sharing, and Follower Creativity: A Cross-Level Investigation. *Frontiers in Psychology, 9*, 1727.
- Weiss, R., Cohen, B., Greenfield, S., Meyer, R., & Mirin, S. (2009, 6). *Jack H. Mendelson*. Retrieved 8 16, 2019, from The Harvard Gazette:
<https://news.harvard.edu/gazette/story/2009/06/jack-h-mendelson/>
- WHO (World Health Organization) . (1992). *International Classification of Diseases: Diagnostic Criteria for Research*, 10th ed. WHO.
- Wilbur, D. L. (1969). Alcoholism: An AMA View. In M. Keller , & T. G. Coffey, *Proceedings of the 28th International Congress on Alcohol and Alcoholism, vol. 2, ed.* Highland Park, Illinois: Hillhouse Press.
- Zukas, H. (1975). *The History of the Berkeley Center for Independent Living (CIL)*. Retrieved 10 18, 2017, from Independent Living Institute (ILI):
www.independentliving.org/docs3/zukas.html
- 安積純子.(1990). <私>へ——三〇年について. 著: 安積純子、岡原正幸、尾中文哉、立岩真也, 生の技法——家と施設を出て暮らす障害者の社会学 増補改訂版 (ページ: 19-56). 藤原書店.
- 安積純子.(1992). 障害をもつ人とピア・カウンセリング. 著: ヒューマンケア協会 , 自立生活への鍵: ピア・カウンセリングの研究 (ページ: 19-28).
- 安積純子, 岡原正幸, 尾中文哉, 立岩真也.(1990). 生の技法. 藤原書店.
- 浅野弘毅.(2000). 精神医療論争史: わが国における「社会復帰」論争批判. 批評社.
- アジア太平洋地域アディクション研究所 (特定非営利活動法人アジア太平洋地域アディクション研究所) . (2006). フェロシップ・ニュース NO.14 新年号. 参照日: 2018年8月3日, 参照先: NPO 法人アジア太平洋地域アディクション研究所: <http://www.apari.jp/npo/fellowship/14.pdf>
- 綾屋紗月.(2009). 前略、離婚を決めました. 理論社.
- 綾屋紗月.(2010a). うまく話せない当事者研究. 現代思想, 38(12), 88-93.
- 綾屋紗月.(2010b). 意味づけ介助. ノーマライゼーション—障害者の福祉, 30(1), 40.
- 綾屋紗月.(2010c). 発達障害・アスペルガー症候群当事者綾屋紗月さんに聞く. 不登校新聞 fonte No.291.
- 綾屋紗月.(2011a). 痛みの記憶—成長の終わり いまの始まり. 現代思想, 39(11), 56-70.
- 綾屋紗月.(2011b). 気持ち悪い模様 16—気持ち悪い文字その3. 精神看護, 14(5), 102-103.
- 綾屋紗月.(2012). ノリに乗れない. 精神看護, 15(6), 68-73.
- 綾屋紗月.(2013a). 当事者研究と自己感. 著: 石原孝二編, 当事者研究の研究 (ページ: 177-216). 東京: 医学書院.
- 綾屋紗月.(2013b). アフォーダンスの配置によって支えられる自己—ある自閉症スペクトラム当事者の視点より. 著: 河野哲也編, 知の生態学的転回3 倫理 人類のアフォーダンス (第3巻, ページ: 155-180). 東京: 東京大学出版会.
- 綾屋紗月.(2016a). 当事者研究の展開—自閉スペクトラム症当事者の立場から. 現代思想, 44(17), 160-173.
- 綾屋紗月.(2016b). 発達障害の当事者研究—情報保障の観点からの考察. 著: 石原孝二, 河野哲也, 向谷地生良, 【編】, 精神医学と当事者(シリーズ精神医学の哲学 ; 3) (ページ: 206-224). 東京大学出版会.
- 綾屋紗月.(2016c). 当事者として、思うこと. 著: 金生由紀子, 渡辺慶一郎, 土橋圭子, 新版 自閉スペクトラム症の医療・療育・教育 (ページ: 287-297). 金芳堂.

- 綾屋紗月. (2017a). 私と私の二人暮らし. 文藝 (2017年冬季号), 56(4), 312-313.
- 綾屋紗月. (2017b). 当事者研究をはじめよう! ——当事者研究のやり方研究. (熊谷晋一郎, 編) みんなの当事者研究 (臨床心理学増刊第9号), 73-99.
- 綾屋紗月. (2018). はじめに. 著: 綾屋紗月 (編著), ソーシャル・マジョリティ研究: コミュニケーション学の共同創造 (ページ: 1 - 22). 金子書房.
- 綾屋紗月. (2019a). 当事者研究が受け継ぐべき歴史と理念. 臨床心理学増刊 11号, 6-13.
- 綾屋紗月. (2019b). 傷を拓く. 臨床心理学, 19(1), 9-14.
- 綾屋紗月. (2019c). 当事者研究を体験しよう! ワークシートを用いた実践. 臨床心理学増刊 11号, 88-105.
- 綾屋紗月. (2019d). ソーシャル・マジョリティ研究とは何か. 情報処理, 60(10), 950-954.
- 綾屋紗月. (2020a). 発達障害を生きる—「コミュニケーション障害」の罫から抜け出すために. ころの科学 SPECIAL ISSUE 2020, 64-71.
- 綾屋紗月. (2020b). 当事者研究に流れる当事者活動の系譜. 著: 松本卓也, 武本一美【編著】, メンタルヘルス時代の精神医学2. ミネルヴァ書房. 印刷中
- 綾屋紗月, 熊谷晋一郎. (2008). 発達障害当事者研究—ゆっくりていねいにつながりたい. 東京: 医学書院.
- 綾屋紗月, 熊谷晋一郎. (2010). つながりの作法—同じでもなく違うでもなく. NHK 出版.
- 綾屋紗月, 上岡陽江. (2017). 発達障害と依存症の仲間が交差するところ——私たちのコミュニケーション方法の開拓と継承. 現代思想, 161-185.
- 綾屋紗月, 熊谷晋一郎, 上岡陽江. (2019). 当事者研究ワークシート実践報告①—薬物依存症当事者研究における実践. 臨床心理学増刊 11号, 106-116.
- 荒井祐樹. (2017). 差別されてる自覚はあるか—横田弘と青い芝の会「行動綱領」. 現代書館.
- 池淵恵美, 向谷地生良. (2006). 統合失調症の症状自己対処—仲間集団での認知行動プログラム. 著: 池淵恵美, 統合失調症へのアプローチ (ページ: 92-122). 星和書店.
- 石原孝二. (2013). 当事者研究とは何か: その理念と展開. 著: 石原孝二【編】, 当事者研究の研究 (ページ: 12-72). 医学書院.
- 石原孝二. (2018). 精神障害を哲学する: 分類から対話へ. 東京大学出版会.
- 泉流星. (2005). 妻はエイリアン〜「高機能自閉症」との不思議な結婚生活〜. 新潮社.
- 伊藤たてお. (2007年2月24日). 遠い昔. 札幌いちご会30周年記念誌 シェア〜共に生きる喜び〜, 28-29.
- 井上茂. (2015). 全国マック協議会とマックグループの活動. 参照日: 2019年10月13日, 参照先: 厚生労働省 https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12205250-Shakaiengokyo/yokushougai/hoken/fukushibu-Kokoronokenkoushienshitsu/s_3_9.pdf
- ヴィクトール・E・フランクル. (1957). 死と愛. (霜山徳爾, 訳) みすず書房.
- ヴィクトール・E・フランクル. (1985). 夜と霧. (霜山徳爾, 訳) みすず書房.
- ウィリアム・ホワイト. (2007). 米国アディクション列伝—アメリカにおけるアディクション治療と回復の歴史. (鈴木美保子, 山本幸枝, 麻生克郎, 岡崎直人, 訳) 特定非営利活動法人ジャパンマック.
- 上野千鶴子. (2013). 「当事者」研究から「当事者研究」へ. 著: 副田義也 (編), 闘争性の福祉社会学 ドラマトゥルギーとして (シリーズ福祉社会学2) (ページ: 25-46). 東京大学出版会.
- ウェブマガジン カムイミントラ. (1992年09月). 北海道難病連. 参照日: 2019年10月30日, 参照先: ウェブマガジン カムイミントラ : <http://kamuimintara.net/detail.php?rskey=52199209t01>
- 浦河べてるの家. (2002). べてるの家の「非」援助論. 医学書院.
- 浦河べてるの家. (2005). べてるの家の「当事者研究」. 医学書院.
- AA北海道地域40周年記念集会実行委員会. (2017). AA北海道地域40周年記念誌〜AAと私の出会い〜, 2-4, 30-36.
- NPO法人リカバリー. (n.d.). トラヴァイユ・それいゆ. 参照日: 2019年10月13日, 参照先: NPO法人リカバリー : <http://www.phoenix-c.or.jp/~recovery/home-1.html>
- 大澤榮. (2010). べてるの家の先駆者たち—苦労を大切に生きる方—. いのちのことば社.
- 大林 宗嗣. (2008). セツルメントの研究. 慧文社(新訂版).
- 岡原正幸. (1990). 制度としての愛情——脱家族とは. 著: 安積純子, 岡原正幸, 尾中文哉, 立岩真也, 生の技法—一家と施設を出て暮らす障害者の社会学 増補改訂版 (ページ: 75-100). 藤原書店.
- 小山内美智子. (2017). おしゃべりな足指: 障がい母さんのラブレター. 中央法規.

- 尾中文哉. (1990). 施設の外で生きる——福祉の空間からの脱出. 著: 安積純子、岡原正幸、尾中文哉、立岩真也, 生の技法——家と施設を出て暮らす障害者の社会学 増補改訂版 (ページ: 101-120). 藤原書店.
- オレンジリボンネット. (n.d.). 気づきの対話 第四回 “エモーショナルリテラシー”. 参照日: 2019年8月27日, 参照先: オレンジリボンネット:
http://www.orangeribbon-net.org/taiwa/naya/naya_1.html
- 上岡陽江+大嶋栄子. (2010). その後の不自由—「嵐」のあとを生きる人たち. 医学書院.
- 上岡陽江+ダルク女性ハウス. (2012). 生きのびるための犯罪 (みち). イースト・プレス.
- 川喜田二郎. (1967). 発想法—創造性開発のために. 中公新書.
- 川村敏明. (1992). 「べてる」に学ぶもの (対談より). 著: べてるの家の本制作委員会, べてるの家の本—和解の時代 (ページ: 160-166). べてるの家.
- 川村敏明. (2003年6月30日). [インタビュー] 非援助の援助 べてるの家と「わかまえのある医療」. 週刊医学界新聞(2541). 参照日: 2019年10月30日, 参照先: 医学書院:
http://www.igaku-shoin.co.jp/nwsprr/n2003dir/n2541dir/n2541_07.htm
- 川村敏明, 浜渦辰二. (2015). 川村敏明先生へのロングインタビューの記録. 臨床哲学, 16, 225 - 253. 参照日: 2019年10月30日, 参照先: <http://hdl.handle.net/11094/51586>
- 木原活信. (1998). J.アダムズの社会福祉実践思想の研究—ソーシャルワークの源流. 川島書店.
- 木村晴美・市田泰弘. (1996). ろう文化宣言. 現代思想, 24, 8-17.
- 木邨真美 玉井紀子. (2007). エイスペースで経験した当事者グループの意義と限界. 著: 石川元 (編), アスペルガー症候群 歴史と現場から究める (ページ: 311-320). 至文堂.
- 熊谷晋一郎. (2018). 当事者研究のやり方マニュアル. (丸善プラネット株式会社, 編)
- 熊谷晋一郎, 綾屋紗月. (2014). 共同報告・生き延びるための研究. (19), 3-19.
- 倉島大樹, 新井宏美, 大村佳奈子. (2007). 高機能自閉症・アスペルガー症候群を対象とするセルフヘルプグループについて—社会的孤立を解消するための支援. 法政大学懸賞論文優秀論文集.
- 下司孝之. (n.d.). 重なる歴史の断酒会 今日に生かす～下司病院と断酒会の歴史を踏まえて～. 参照日: 2018年8月1日, 参照先: 一般財団法人 日本禁酒同盟:
<http://nippon-kinshu-doumei.fd531.com/20130928%20Geshi%20Word.pdf>
- 全日本断酒連盟 (公益社団法人全日本断酒連盟). (n.d. a). 松村春繁伝. 参照日: 2019年10月30日, 参照先: 公益社団法人全日本断酒連盟: <http://www.dansyu-renmei.or.jp/zendanren/douhyou.html>
- 全日本断酒連盟 (公益社団法人全日本断酒連盟). (n.d. b). 全断連の歴史 | 断酒会の誕生. 参照日: 2019年10月30日, 参照先: 公益社団法人全日本断酒連盟:
http://www.dansyu-renmei.or.jp/zendanren/rekishi_1.html
- 河野哲也. (2011). エコロジカル・セルフ. ナカニシヤ出版.
- 小林哲夫. (n.d.). 分かち合い、癒し合う: なぜ断酒会で酒がやめられるのか. 参照日: 2018年7月29日, 参照先: 高知県断酒新生会: <http://www.kcb-net.ne.jp/dansyu/naze.htm>
- 近藤恒夫. (2007年7月16日). 第24回 日本ダルク代表・NPO法人アパリ理事長 近藤恒夫・その2-今日一日のためだけに, vol.90. 参照日: 2019年10月30日, 参照先: 人材バンクネット 魂の仕事人:
<http://www.jinzai-bank.net/edit/info.cfm/tm/090/>
- 斎藤学. (1998). 薬物依存と精神療法. 著: 加藤信・鈴木勉・高田孝二 (編著), 薬物依存研究の最前線. 星和書店.:
https://www.iff.co.jp/ssworld/mssg/mssg_14.html
- 斉藤道雄. (2002). 悩む力—べてるの家の人びと. みすず書房.
- 斉藤道雄. (2010). 治りませんように—べてるの家のいま. みすず書房.
- 佐々木かすみ, 田熊立. (2010). 広範性発達障害のある成人への福祉サービスとしての「本人会」—当事者のニーズと支援に必要な条件の検討. 5, 118-128.
- 定藤丈弘. (1993). 障害者福祉の基本的思想としての自立生活理念. 著: 定藤丈弘、岡本栄一、北野誠一 (編), 自立生活の思想と展望—福祉のまちづくりと新しい地域福祉の創造をめざして (ページ: pp.2-21). ミネルヴァ書房.
- 山下幸子. (2008). 「健常」であることを見つめる: 一九七〇年代障害当事者/健全者運動から. 生活書院.
- ジェームズ・ジェローム ギブソン (2004). ギブソン心理学論集: 直接知覚論の根拠. (境敦史, 河野哲也, 訳) 勁草書房.

- 嶋田総太郎. (2009). 身体保持感とラバーハンド錯覚／運動主体感. 著: 開一夫, 長谷川寿一, ソーシャルブレインズ (ページ: 75-76). 東京大学出版会.
- ジャパンマック (特定非営利活動法人ジャパンマック). (n.d.). 特定非営利活動法人ジャパンマック(JMAC)とは. : 歴史. 参照日: 2019年10月30日, 参照先: 特定非営利活動法人ジャパンマック: <http://japanmac.or.jp/about/history.html>
- ジュディス・L・ハーマン. (1999). 心的外傷と回復 (増補版). (中井久夫, 訳) みすず書房.
- 全国自立センター協議会. (n.d.). 参照日: 2018年10月25日, 参照先: 全国自立センター協議会: <http://www.j-il.jp/>
- 全国障害学生支援センター. (n.d.). あゆみ. 参照日: 2019年8月27日, 参照先: 全国障害学生支援センター: <https://www.nscsd.jp/Organization/ayumi.htm>
- 高田実. (2012). ゆりかごから墓場まで—イギリスの福祉社会—一八七〇〜一九四二年. 編著: 高田実・中野智世, 近代ヨーロッパの探究 15 福祉 (ページ: 65-114). ミネルヴァ書房.
- 立岩真也. (1990). はやく・ゆっくり—自立生活運動の生成と展開. 著: 安積純子, 岡原正幸, 尾中文哉, 立岩真也, 生の技法—家と施設を出て暮らす障害者の社会学 増補改訂版 (ページ: 165-226). 藤原書店.
- ダルク女性ハウス. (n.d.). ダルク女性ハウスとは. 参照日: 2019年8月27日, 参照先: ダルク女性ハウス フリッカ・ビーウーマン (生活訓練・就労継続支援 B 型): <http://womensdarc.org/ダルク女性ハウスとは/>
- ダルク女性ハウス, 当事者研究チーム「なまみーず」, ゆりこ, みつよ, ちえぞう, Rieko. (2009). Don't you? ～私もだよ～ からだのことを話してみました. 特定非営利活動法人ダルク女性ハウス.
- テンプル グランディン. (1997). 自閉症の才能開発—自閉症と天才をつなぐ環. 学習研究社.
- 中西正司. (2014). 自立生活運動史—社会変革の戦略と戦術. 現代書館.
- 長屋敏男. (1992). 「べてる」の人たちとの出逢い. 著: べてるの家の本制作委員会, べてるの家の本—和解の時代 (ページ: 125-127). べてるの家.
- 日本禁酒同盟 (一般社団法人日本禁酒同盟). (n.d.). 日本禁酒同盟のあゆみ. 参照日: 2018年7月29日, 参照先: 一般社団法人日本禁酒同盟: <http://nippon-kinshu-doumei.fd531.com/a-ayumi-01.html>
- 日本赤十字社 浦河赤十字病院. (n.d.). 病院概要. 参照日: 2019年1月27日, 参照先: 日本赤十字社浦河赤十字病院: <http://www.urakawa.jrc.or.jp/hospital/index.html>
- 日本ダルク. (2019年1月23日). 全国の DARC : 日本全国のマックダルク所在地 2019年1月23日現在. 参照日: 2019年5月1日, 参照先: 日本ダルク: https://docs.google.com/viewerng/viewer?url=http://darc-ic.com/wp-content/uploads/2019/01/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%85%A8%E5%9B%BD%E3%81%AE%E3%83%9E%E3%83%83%E3%82%AF%E3%83%80%E3%83%AB%E3%82%AF%E6%89%80%E5%9C%A8%E5%9C%B0_2019.01.23.pdf
- ニューべてる製造販売事業部出版チーム. (2004). ぱびぶべぼ VOL. II (101号～200号) べてる家の生活日記 . べてるの家.
- Necco 当事者研究会. (2012). Necco 当事者研究会会報. vol.16.
- Necco 当事者研究会. (2013). 発達障害者による当事者研究会. 著: 石原孝二 (編), 当事者研究の研究 (ページ: 271-291). 医学書院.
- 野口裕二. (1996). アルコリズムの社会学: アディクションと近代. 日本評論社.
- 野口裕二. (2002). 物語としてのケア. 医学書院.
- 野口裕二. (2005). ナラティブの臨床社会学. 東京, 東京: 勁草書房.
- 信田さよ子. (1999). アディクションアプローチ—もうひとつの家族援助論. 医学書院.
- 信田さよ子. (2014). 依存症臨床論—援助の現場から. 青土社.
- 早坂潔. (1992). 「べてる」と共に歩んで. 著: べてるの家の本制作委員会, べてるの家の本—和解の時代 (ページ: 51-57). べてるの家.
- 廣野俊輔. (2019). 『とうきょう青い芝』. 参照日: 2019年7月27日, 参照先: arsvi.com: <http://www.arsvi.com/o/a01-13m.htm>
- 藤田さかえ. (1993). 自助グループ. 著: 河野裕明・大谷藤郎【編】, 我が国のアルコール関連問題の現状—アルコール白書 (ページ: 285-301). 厚健出版. 参照日: 2019年10月30日, 参照先: 健康日本 21: http://www.kenkounippon21.gr.jp/kenkounippon21/about/kakuron/5_alcohol/

alchol_pdf/alchol_40.pdf

- べてるの家の本制作委員会 編集協力 向谷地生良. (2009). レッツ！ 当事者研究 1. NPO 法人地域精神保健福祉機構・コンボ.
- べてるの家の本制作委員会 編集協力 向谷地生良. (2018). レッツ！ 当事者研究 3. NPO 法人地域精神保健福祉機構・コンボ.
- べてるの家の本制作委員会. (1992). べてるの家の本一和解の時代. べてるの家.
- ヘルシー・ソサエティ賞事務局. (2014). 第 11 回受賞者. 参照日: 2019 年 5 月 29 日, 参照先: ヘルシー・ソサエティ賞: http://www.healthysociety-sho.com/past/pdf/h26_ito.pdf
- 北海道難病連 (財団法人北海道難病連). (1993). 北海道難病団体連絡協議会結成大会 難病患者・障害者と家族の全道集会 大会宣言・基調報告・アピール・集会決議 1973 年～1993 年. 財団法人北海道難病連.
- 北海道難病連 (一般財団法人北海道難病連). (n.d.). 北海道難病連の紹介. 参照日: 2019 年 8 月 13 日, 参照先: 一般財団法人北海道難病連: <http://www.do-nanren.jp/syokukai/index.html>
- マイケル・オリバー, ボブ・サーペイ. (2010). 障害学に基づくソーシャルワーク: 障害の社会モデル. 金剛出版.
- 宮島美智子. (1992). 私の出会った人たち. 著: べてるの家の本制作委員会, べてるの家の本一和解の時代— (ページ: 34-44). べてるの家.
- 向谷地生良. (1992a). 弱さをきずなに (クリスチャンセンター講演より). 著: べてるの家の本政策委員会, べてるの家の本一和解の時代 (ページ: 168-191). べてるの家.
- 向谷地生良. (1992d). S さん、ありがとう. 著: べてるの家の本制作委員会, べてるの家の本一和解の時代 (ページ: 215-219). べてるの家.
- 向谷地生良. (1992f). 《私の出会った子供たち》誇り. 著: べてるの家の本制作委員会, べてるの家の本一和解の時代 (ページ: 196-199). べてるの家.
- 向谷地生良. (1992g). 役に立つということ. 著: べてるの家の本制作委員会, べてるの家の本一和解の時代 (ページ: 220-223). べてるの家.
- 向谷地生良. (2008). べてるな人びと 第 1 集. 一麦出版社.
- 向谷地生良. (2009a). 統合失調症を持つ人への援助論—一人とのつながりを取り戻すために. 金剛出版.
- 向谷地生良. (2009b). 技法以前—べてるの家のつくりかた. 医学書院.
- 向谷地生良. (2010). 序—遣わされた者として. 著: 大澤榮【編著】, べてるの家の先駆者たち—苦労を大切に生きる方— (ページ: 3-5). いのちのことば社.
- 向谷地生良. (2012). ソーシャルワークにおける当事者との協働. 著: 一般社団法人日本社会福祉学会 編, 対論社会福祉学 4 ソーシャルワークの思想 (ページ: 245-273). 中央法規.
- 向谷地生良. (2013a). 当事者研究ができるまで. 著: 石原孝二編, 当事者研究の研究 (ページ: 150-175). 医学書院.
- 向谷地生良. (2013b). はじめに. 著: 向谷地生良・小林茂【編著】, コミュニティ支援、べてる式。 (ページ: 4-11). 金剛出版.
- 向谷地生良. (2013c). 当事者研究とは—当事者研究の理念と構成—. 参照日: 2019 年 10 月 30 日, 参照先: 当事者研究ネットワーク: http://toukennet.jp/?page_id=56
- 向谷地生良. (2015a). 精神障害と教会—教会が教会であるために. いのちのことば社.
- 向谷地生良. (2015b). 生きる苦労を取り戻す—べてるの家の 30 年の歩みから— (社大福祉フォーラム 2014 報告) (記念講演). 社会事業研究(54), 9-18.
- 向谷地生良. (2016a). 当事者研究と精神医学のこれから. 著: 石原孝二, 河野哲也, 向谷地生良 (編), 精神医学と当事者 (ページ: 180-205). 東京大学出版会.
- 向谷地生良. (2016b). 向谷地さん、幻覚妄想ってどうやって聞いたらいいんですか? (4) オープンダイアローグは波乗りです. 精神看護, 19(5), 449-456.
- 向谷地生良, 浦河べてるの家. (2006). 安心して絶望できる人生. 東京: NHK 出版.
- 向谷地生良・川村敏明・渡辺さや可. (2013). 浦河におけるコミュニティ支援. 著: 向谷地生良・小林茂【編】, コミュニティ支援、べてる式。 (ページ: 19-35). 金剛出版.
- 向谷地生良・小林茂. (2013). 浦河におけるコミュニティ支援 (総論). 著: 向谷地生良・小林茂【編著】, コミュニティ支援、べてる式。 (ページ: 36-50). 金剛出版.
- 向谷地生良, 辻信一. (2009). ゆるゆるスローなべてるの家. 大月書店.
- 向谷地悦子. (2014). 「浦河べてるの家」のあゆみから. 著: 富坂キリスト教センター【編】, 行き詰まりの先にあるもの—ディアコニアの現場から— (ページ: 167-214). いのちのことば社.

- 文部科学省. (n.d.). 特別支援教育について. 参照日: 2017 年 12 月 19 日, 参照先: 文部科学省:
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/004/008/001.htm
- 谷中輝雄. (1995). 早川進とやどかりの里. 著: 坪上宏, 谷中輝雄【編著】, 当たり前の生活 PSW の哲学的基礎:
早川進の世界 (ページ: 3-84). やどかり出版.
- 谷中輝雄, 向谷地生良. (2003). やどかり vs. べてる 誠に勝手ながら 2003 年を当事者元年とさせていただきます.
精神看護, 6(1), 58-68.
- 山本美香. (2017). 地域福祉とは何か. 著: 【責任編集】山本美香【編】福祉臨床シリーズ編集委員会, 地域福祉の
理論と方法 第 3 版 (社会福祉士シリーズ 9) (ページ: 1-18). 弘文堂.
- 横川和夫. (2003). 降りていく生き方―「べてるの家」が歩む、もうひとつの道. 太郎次郎社.
- 横田弘. (2015). 障害者殺しの思想【増補新装版】. 現代書館.
- 横塚晃一. (2007). 母よ! 殺すな. 生活書院.
- 和気純子. (1999). エンパワーメント・アプローチの形成. 著: 古川孝順【編著】, 社会福祉 21 世紀のパラダイム
2 方法と技術 (ページ: 201-218). 誠信書房.
- 渡邊琢. (2011). 介助者たちは、どう生きていくのか―障害者の地域自立生活と介助という営み. 生活書院.